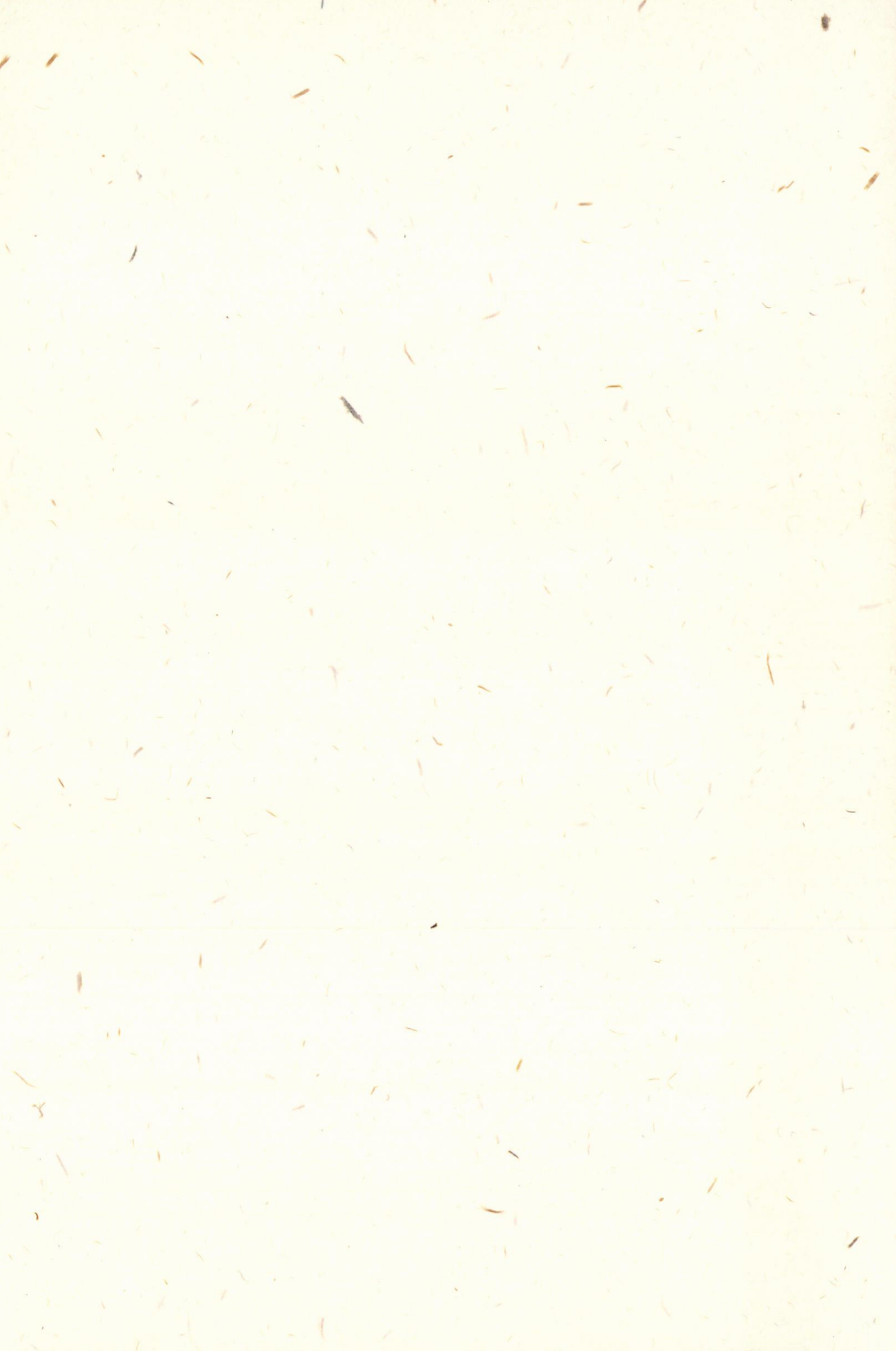


連
句

猫蓑作品集Ⅸ





序

「猫蓑作品集Ⅸ」は平成十年の十一月、投稿された作品総数六十九巻を収録したものである。この数は昨年のⅧ号より二巻多いが、歌仙・半歌仙・百韻がそれぞれ一巻ずつ減少しており、三十巻・十一巻・一卷となっているのに対して、短歌行が七巻となっているのが目立っている。

あとは表合せ一卷と十八公一卷であった。

短歌行がふえたのは国民文化祭ぎふでこの形式が採用された為であるが、そのため、折角、一応なじんでいた源心（二十八句）の形式が消滅してしまったのはすこし淋しい気がする。

連句作品の批評・鑑賞に関する座談会、これは従来の外部の人の意見をきくよりも、まず、猫蓑会の中にどの

ような意見を持っている人があるのか、それを知り、互いに勉強する事が大切だと思ったので、猫蓑会に入ってまだ比較的日子の浅い方々を中心に集まっていたのだが、結果はいろいろすぐれた意見を聞くことができ、有意義であつた。

毎年ではあるが、座談会を司会して、このように纏められた式田和子さん、ならびにこの作品集刊行に尽力された下鉢清子さん・梅田利子さんに感謝する次第である。

平成十一年一月十二日

東 明 雅

ほととぎす 田村 満子 捌 60

入道雲 豊田 好敏 捌 62

夜をこめて 長崎 和代 捌 64

青嵐 橋野 代々子 捌 66

神の留守 膝送り 68

英二・水壺・政志

守男・健悟・一郎

慎二

ほんのりと 文音 すが・健悟 70

五葉松 松本 碧 捌 72

和宮御降嫁 本屋 良子 捌 74

原宿 八代 嫋 捌 76

夏帽子 山口 みづゑ 捌 78

夏椿 吉村 ゑみこ 捌 80

短歌行

馬の駟 加藤 道子 捌 84

猿梨の実 久保田 庸子 捌 86

初月夜 近藤 守男 捌 88

奥武蔵 佐藤 世彌子 捌 90

大河めく 長坂 節子 捌 92

夜長 原 みね子 捌 94

星合 矢崎 藍 捌 96

二十韻

五葉の松 稲垣 渥子 捌 100

再会や 稲田 千寿 捌 102

下り築 猪子 春治 捌 104

さみだるる 木村 真呂 捌 106

翁の忌 桑原 美津 捌 108

梅雨明くる 篠原 達子 捌 110

スベードのクイーン 島村 暁巳 捌 112

俳諧の話 杉山 壽子 捌 114

十三夜 武村 利子 捌 116

合歡の花	橘	文子	捌	118
冷奴	谷本	守枝	捌	120
秋果の香	田部	みどり	捌	122
冬ぬくし	中川	哲	捌	124
打たれ上手	長谷川	芳子	捌	126
夜の画布へ	細川	研三	捌	128
月山や	東	郁子	捌	130
石路咲いて	宮川	侑子	捌	132
棚田	和田	順子	捌	134
半歌仙				
遠き日の	青木	泉水	捌	138
鳴き変へて	秋山	志世子	捌	140
石神井や	両吟	水壺・かりん		142
紅葉見や	加藤	治子	捌	144
仁王の笑み	佐々木	有子	捌	146
新緑を	鈴木	千恵子	捌	148

桜桃忌	須田	智恵	捌	150
飛翔	八角	澄子	捌	152
水の匂ひ	百武	冬乃	捌	154
壁に雲立つ	山口	美恵	捌	156
陰の雪	山崎	一恵	捌	158
十八公 九月一日	権頭	和弥	捌	160
表合せ 望郷や	秋元	正江	捌	162
百韻				
熱き息	両吟	淑代・健悟		164
あとがき	下鉢	清子		167

＊ ＊ ＊

短歌行 あぶれ蚊

あぶれ蚊と御門をくぐる芭蕉庵

秋海棠のひそと咲く庭

月光に星次々とまたたきて

ファッションショーなど見た事もなし

約款をルーペでたどる契約書

すこし辛めの牛丼が出る

筑摩祭少女は紙の鍋かぶり

三つ編とけば香るシャンプー

ミサイルに平和の夢を破られて

座禅に響く警策の音

黄昏の空いっぱいの花篝

仔雀狙ふ屋根のボス猫

矢崎 藍

東明 雅

吉澤 蘭石

倉本 路子

近藤 守男

藍

雅

石

子

男

雅

藍

オ^ナレンジとレモンにジンで焼くスフレ

鼻の脂でちんぷいぷい

角筋に王手飛車とり奇手のあり

官庁街の裏の溝川

アテネよりローマへ巡る旅衣

ラテン語の詩句捧ぐミュージズに

寒木瓜の紅^ベ嬢^にの口紅の跡

淑女が魔女に変わるお時間

地^{ナウ}の底へ共に堕ちましょエレベーター

同じ病に同じ病院

花の下歓送の宴盛り上がり

ひとつ跳ねたる乗っこみの鮒

平成十年十一月一日 首尾
於 江東区芭蕉記念館

石 子 男 藍 雅 子 石 雅 藍 男 子 石

合 評

―連句批評の方法と基準―

出席者

東 明雅・鈴木 慎二・島村 暁巳
佛淵 健悟・川名 将義・椿 紀子
浅賀 淑代・八代 嫻・（順不同）

司会・文責 式田 和子

平成十年十一月十四日

於 原宿 東郷神社社務所

司会 本日はお忙しいところご出席いただきありがとうございます。ございました。

ご存知の通り、猫蓑会の会員の作品集には、例年巻頭に、諸先生方をお招きして合評をお願いして掲載しておりますが、どうも当方の狙いと少し内容がずれるように思われます。そこで、今年は、猫蓑の中で、新人にお願いしてご自分の実作の経験などから、「正しい批評の方法とは何か」にせまってみようと思っております。作品はお送りしてございますのでよろしくお願い申し上げます。では、明雅先生どうぞ。

明雅 今までの例ですと、連句一卷の批評というより、一句一句の批評が中心になりそれだけで終わって一卷全体の批評鑑賞には達しない。そこで、よその派の人より、自

分の教えた人、その中で比較的新しい方々がどういう考えを持っているか、私の教えたことをどう受け止めているかを確かめ、これを通して、猫蓑の人全体が一卷批評の方法基準は何かを考えるヒントにしたいと思えます。だから、一句一句の良さ悪さはもちろんですが、付味・転じ・一卷の展開・ヤマ場などまで吟味して結論まで行きたいと思えます。

連句を巻くについての自在な考え方

司会 それでは作品について入らせて頂きます。私は、この作品のねらいは「面白い」方へいっていると思います。が。

明雅 どの辺でしょうか。

司会 猫蓑の作品は、綺麗すぎるのか、まとまりすぎるとかいわれることがあります、この作品はそれを打破っているような気がしますので。

明雅 私は別に意識しておもしろい作品を作ろうとしたのではありませんが、もし、そうだとすれば、これは膝送りでやったので、連衆の個性が十二分に発揮されたせいだと思います。

司会 この一卷を面白く仕立てているということにつきましては、先生は膝送りだからとも、連衆が揃ったからともおっしゃいますが、作品の作りとして、ナウまで恋を流し込んでるのが目立ちまして、これが作品を面白くしているのではないのでしょうか。

慎二 ナオのラテン語から恋でしようか。

明雅 恋の呼び出しでしようね。

紀子 「ミューズ」は女神ですから、恋の呼出しととりました。

アテネにも女神をかすかに感じます。恋が、ナウ折立まで続いているのですね。

明雅 昔は恋も花も出るにまかせ、非常に自由でした。芭蕉の作品にも名残の裏になって恋を出した例が幾つもあります。いいではありませんか。

曉巳 自分で捌いていると、花の辺りに恋の三句目が来ると、恐らくもう恋はいいといってしまうす。

健悟 「アテネ」から「魔女」まで女性を表わす言葉が賦物のように続いています、停滞した感じはないですね。ナウ折立の「地の底へ共に堕ちましょう」はとても俗調ですが、前四句の詰まった感じを救っているように思えます。

曉巳 ちょっと看護ヶ島のような気分ですね。

紀子 呼出しから地の底の句までは、虚の句というか、物語句ですね。現代の恋は実の面が欲しいかなと思います。

淑代 アテネ・ミューズ・嫦娥・魔女と続いて、しかも言葉がどんどん強くなります。恋句が固まりのように見えますが、そのようなところがあっても面白いのではないのでしょうか。連衆が楽しんでる様子がわかります。前句には付いていても、転じがなければならぬのですが、この場合承知の上で狙った感じもします。ナウの一、二は述懐の句と思いますが、軽みと思われる付けで達者だなあと思っています。

将義 ナウ(二)の同じ病に同じ病院はよくきいています。

嫺 私もナオからナウにかけての恋は冒険だな、と思いました。自分が捌でしたら、ナウの折立で気分を変えて

しまったでしょう。

この一連の恋句は、言葉が強い割には、イメージが顕著てきません。

淑女が魔女に変わるお時間は、月で魔女が付いたのだと思いますが、説明に過ぎたかもしれません。

一同 わりによくある句です。

紀子 地の底の句は軽い句調で、次の句も軽さで成功しているのですね。

嫋 軽みという点では、発句で「あぶれ蚊」と打出して軽みの挨拶をしました。又、「あぶれ蚊」と「御門」を出したのも雅俗が混じり合って心のはずみを感じます。私は芭蕉の「わが宿は蚊の小ささを馳走なり」を思い出しました。

暁巳 この一卷は人がいつも声高に主張しているようですね。

司会 膝送りでは、負けたくない負けたくないとなります。文音も同じですが。

淑代 先程も触れましたが、一卷通してナオの恋のあたりに固まりがあります。それもいいのではないかと思えます。打越しがどうかという点ばかりが問題ではないと思いますので…。

暁巳 打越しとかいろいろ考えて、面白さの追及に手が廻ら

ないというのが我々初心者の実情ではないかと思えます。障りが先に目についてしまう。

明雅 恋は猫蓑では、二句とか三句とかで納めるのがならわしですが、式目では五句までは良い。ただその五句がうまく転じられるかなど難かしい問題があります。それで、従来はなかなか三句・四句まで続けられなかったのです。その点、この作品の恋句はよく転じているので助かりました。

健悟 膝送りは、一人ひとりが自分の付け番をクリアすればいいということで、一卷の見通しが甘くなる傾向があります。この巻は目配りが効いていますね。

出勝と膝送り

司会 恋は一応お休みにして、実作の問題点、出勝と膝送りについていかがですか。また、今回は「短歌行」をなさいました。

明雅 岐阜では来年この形式で全国大会をやるから、短歌行を勉強してみました。各務支考が考えた形式です。箴（エビラ）も句数は同じ二十四句。従来国民文化祭で使われていた半歌仙がどうも中途半端だったのにくらべるとベターなものだと思います。

曉巳 膝送りの場合は出勝に比べて「ご再考」がやや言い難いです。

明雅 昔は芭蕉のを見ても殆ど膝送りです。「ご再考」を願えないことはありませんよ。

司会 近頃は募吟などを見ますと、「衆議判」もあります

淑代 猫蓑では衆議判をあまりしませんので、他の方々の座で思うことですが、衆議判は皆、それぞれの主張があつて、まとまるまでに時間がかかることがあります。膝送りは本当の意味での付け合いが楽しめるのではないかと思います。先生のいわれる「連衆心」というか…。

慎二 力量が大体揃つていれば、経験上膝送りはうまくいくと思う。しかし、一巻としてのデキは出勝のほうがよいような気がする。座の雰囲気をよくすることも、連句のひとつの要素と考えれば、一巡まで仲々出ないでやつと出てきた句が、気に入らなくてもそれは採った方が結局よい一巻になるかも知れません。付け心は基本的には自由であり、何がでてくるかわからない所にスリルもあり、付け難いなどという余地はなくてよいのではないでしょう。

紀子 進行の指図をして、捌きの意志がちゃんと出たほうがいいのですか？

曉巳 膝送りするときは、組合せ次第ということもあります。

嫺 膝送りはある程度経験が必要だと思います。私はまだ緊張します。出勝の一巡で最後に残った時のプレッシャーと同じです。

又一方、膝送りは他の人が付けている間に全体が見渡せるといふ良さも感じます。レベルの高い膝送りに入れていただき鍛えていただけたらと思います。

慎二 詩情としてのバランスも重要と考えられますので、私としては捌の意志はちゃんと出た方がよいように思います。膝送りは少し余裕があるとも考えられますが、出勝もいつも出し続ける訳でもないのですから、緊張が続いて（新人として入ったとき）も我慢できる範囲ではないかと思ひます。

曉巳 膝送りだと息が抜けない感じがします。

司会 反対に自分の番でなければ、ゆっくり吞めていいという方もあります。

紀子 出勝は修練にはよろしいでしょうね。

曉巳 “そんなこと、どこに書いてありますか”と聞きたくなる様な式目の拡大解釈がたまにはありますが…。

淑代 三、四人ということであれば膝送りは楽しいです。

この一巻の連衆は、もしかしたら六、七人？

曉巳 楽しいということになると、出勝かな…。

健悟 以前「ねこみの通信」(27号)で明雅先生に書いて頂いた中に、膝送りはある程度の水準にないと楽しめないやり方とありましたが、力量が拮抗しているとはり合いますね。

明雅 芦丈先生は信大連句会では、出勝以外はなさいませんでした。これはそのころ弟子の私たちの力が足りなかったからで、他の場所では結構膝送りもやってもらいました。

曉巳 新しく連句を始めた人には膝送りは辛いのでは。将義 時には、今日は参加するだけの日だなあ…などと思ったりすることもありました。近頃は少し馴れまして、隣りの人にフォローしてあげたいと思うときもあります。司会 それが連句でしょう。助け合うわけですから、ただ、進行上のひっかかりのあるときは、どこか相談する人がいる方がいいわけです。作品に「加朱」とついているのは、先生格の方に朱を入れていただいたという事でしょか。

明雅 「加朱」というのは元来出来上った作品を一座していなかった人に添削してもらおう事を言うわけでしょう。一座している人がその場で添削したのは捌きで、加朱というのはおかしいですね。

健悟 現代では作品に捌き名を入れますが、芭蕉の頃の作

品にはそういう書き込みはないですね。芭蕉が一座してない一巻の場合、誰がリードしたのか、別な知識から探らないと分からないですね。

明雅 俳諧はもともと共同制作の文学ですから、制作者として捌の名を記すのはなじまなかったのでしょうか。

付け方の「親」と「疎」

司会 付け方についての疑問も、作品によって考えて下さい。

淑代 付け方は、付く、転じるが基本ですが、ウ(四)のミサイルと(内)座禅あたりは、座禅の句が遣句なのでしょうか。一句そのものは軽くはないのですが、付けの距離は「疎」ですね。

(四)のシャンプーの句と、(五)のミサイルの句の付合は、「三つ編」と「シャンプー」が「夢を破る」によく付いて、この一巻の中で好きな箇所です。

娟 ウ(三)の筑摩祭の句についてですが、この場合は前句によく付いています。しかし、一句の仕立て方はこれでよいのでしょうか。歳時記の言葉をそのまま句にした感じですか。前句に付き、打越しと転じていればよいのか。

もう少しひねらなくてよいのか。そこがわかりません。先生の「猫蓑」や「新炭俵」を読むと、一句それ自体にも俳諧味がただよっていると感じたのですが。

淑代 嬬さんのおっしゃることに同感です。この句は筑摩祭そのものの説明でひねりがないですものね。でも、これはこれでよいのかもしれないですね。

健悟 平句と俳句の違いといえるでしょうか。「筑摩祭少女は紙の鍋かぶり」のようなのは、俳句では季語の説明だの、季語の引き延ばしだのといふ事は言われません。「少女」を「比丘尼」などにすると、違ってくるでしょう。でも、やりすぎかも知れませんが。いずれにしても、前句と付句で進む連句では、一句の曲をどの程度まで求めればよいのか。「夜店のステッキ」などともからめ難かしいところです。

註（筑摩祭は、男の数だけ鍋を冠するということから、いまは紙の鍋を冠る）

明雅 大打越あたりから一ひねりひねった句が続いている。この句まで一ひねりしたら、それこそ肩胛をはった句が続くさわがしい一巻になるでしょう。

嬬 俳句では「ひそと咲く庭」というような句の場合「ひそ」はいらないということになります。

将義 俳句の場合は、省略の文芸とも言われますから、ど

うしてもけずれけずれという。

司会 芝居で「使い残して二分残る」という台詞がありますが、俳句は使い切れといい、連句は二分残して、あとの人が付ける部分を残しておく、という考え方でしょうか。

健悟 先生のご本（新炭俵）では、連句鑑賞のポイントの一つとして、「一句一句の独自のおもしろさ」をあげておられますが、俳句と付句では基準が違いますよね。そこをアイマイにしていると、いわゆる「連句をやると俳句がヘタになる」という俳句の方からの不満が出てくるのでしょうか。誤解が多いにしても、根拠のない懸念とは思わないです。 ※

嬬 私は俳句もやっていますが、俳句を学べば芭蕉を学び、芭蕉を学ぶには連句を学ぶ、というのは自然のことでしょう。しかし、連句をただの遊びと考えている人は少なからずいます。

六年余連句を学んできて、その深さと広さ、そして厳しい修練を要求される場であると痛感しています。

それでも、付けて付けられる心の交流と一つの作品を皆で作りに上げていく喜びは俳句で味わえないものでした。

将義 俳句がつまらなくなってきた場合もあるのです。紀子 新しい句を作ろうとするよりも、新しいつけ所をお

探しなさい、と教えられました。それが醍醐味でもあります、やはり新しい表現が欲しいです。現代の心理・深層をひとひねりしたような……

暁巳 付け方のお講義で、降る雪や に、明治は遠くなりけり の草田男の句を一章体の例でお出しになりました。よい付けは芸術の根源的なものだから、生涯に一度はいい付けを付けたいです。

明雅 私が「一句としてのおもしろさ」と言っているのは、あくまでも平句としてのおもしろさです。切字がなくても、季語がなくても、結構発句と匹敵する平句があり得るということですが、私は毎句毎句こんな完成された平句を出せというわけではありません。発句を除いた一卷三十五句がみんなすばらしい平句だったら、それこそ、その一卷は「「夜店のステッキ」で息のつまる作品になるでしょう。

淑代 連句はその中に生きる、というもののように思います。連句一卷の中に自分がどう生きたかがポイントになると思います。また、他の方々の巻かれた作品を読む場合でもそれは同じかと。俳諧人として共作の場がもてるというのは豊かなことだと思います。

暁巳 人の付けでいいのがあれば、「あつやったノ」と、座全体が思うのがとても良いのではないでしょう。

明雅 俳諧は近世庶民の最高の楽しみだったのです。私は現代庶民の一人として、連句をひろめ皆に楽しんで貰いたいと思っています。

暁巳 先生、昔はずい分連歌が民衆の中に行き渡っていて、狂言にはいくつもございますね。連歌にのめり込んで遊び歩いていた夫に愛想をつかした妻が家を出るといい、とぼとぼと出ていくと、夫が「いまだ見ぬ、二十日の宵の三日月は」と、呼びかけると、妻は一度出ていったのが帰って来て、「今宵ぞ出づる身こそつらけれ」と脇をつけて、めでたく仲直りするというのがあります。楽しいですね。

明雅 あ、「箕被^{みかづき}」ですね。狂言には連歌を題材としたものはいくつもありますよ。

慎二 ところで、淑代さんが「英語連句の試み」を連載しておられますが、連句の将来性といった観点からも意義あることと思うし（虫の声も聞き分けられない）外国人でも、その付け味の英語表現はかえって勉強になったりしています。もっともウィットやユーモアはもととお手のものなんでしょうから欧米に連句文化が浸透するのは、交番が「KOBAN」としてまかり通っているように「RENKU」となる可能性は充分にあるのではないのでしょうか。

曉巳 ケント・ギルバートさんは、虫の音でも雑音に聞こえるかと話していました。脳の機能の差から日本人のようにには情緒的に聞えないようですね。もっともドイツの雨は日本人が聞いてもバシバシバシだけのようですが。司会 日本人の繊細な感性を連句によって残したいものですね。

読み方・作り方・軽み

淑代 こんど、この事がありましたので、一生懸命読みました。やはり他の方の作品も丁寧に読むことが大切だと思いました。

紀子 片假名が多いのが目につきました。

健悟 この作品は男性的な一巻ですね。男性的という言い方はいいたとえばじゃないかも知れませんが、構成的であること、キレがいいこと、感受性の繊細さを競う、といった方向に淫していないこと、そんなところですかね。おおらかな陽性の力というのが、俳諧では大事にしたい特質だと感じています。

曉巳 俗に言ったら、変ったことを競うあまりに狭い道に入る弊に気を付けたいです。

司会 おっしゃる通りです。私も、句が出なくなった方に

対して、穴を掘るのを止めて、広いところを見て下さい、と申しますよ。

明雅 そらだ 付け方で空擽の付けはいいけれど無心所着はダメです。詳しいことは「ねこみの通信」30号と31号に書いてありますが、簡単に言えば、前句に対して意識的に趣向を立てて付けるのではなく、直観的にインスピレーションで浮び上った句が、突拍子もなく離れた疎句であったのが空擽の句であり、最初から離れた疎句をねらって、

付句を先に作っておき、前句は何であろうとそれで付け、ミス・マッチの効果を狙うのが無心所着です。連句は、前句にどんな付句をするか、ここが生命とでも言うべきところですから、それを否定する無心所着は一種の自殺行為だと思うのです。

司会 それでは、一巻の山・場・の考え方については？

まず、序破急の付け方は？

曉巳 山のとり方は分っていても句が出てこないという事もあります。自分の一座だと思えば、序破急を付けたければ題材を示唆することでもいいのですか？

一同 題材を決めすぎないで欲しいと思うこともあります。決められた枠の中では楽しい連句は出来ません。

淑代 自分の考えているのと違う発想が出て来たら、嬉し

曉巳 式目がないと捌けないのでは……と思うこともありま

すが……。型から出るチャレンジもしたい。

健悟 序破急の概念は有効だと思います。懐紙に連句を書くというようなことは、もう今の人には分らない筈だという、そういうことではなく、懐紙式の序破急の工夫は生理的な快感原則にもマッチしています。フルコースをいただく手順のようなものですね。

明雅 懐紙式は短歌行や二十韻などには必要なものです。

淑代 今回短歌行が示されましたので、先生にお聞きしたいと思っておりました。短歌行は比較的序破急がつけやすいと思うのですが、二十四句という句の数のせいでしょうか。同じ二十四句でも、箴——あれは折がありましたっけ？ ありましたね。——は、二面二折に、六・六・六・六と句が立って、馴染みのない形式のせいか、序破急の運びが難しい。また、二十韻は、何巻か勉強させていただいています、うまく序破急のついた一巻となると……。なかなか難しいのです。

明雅 もちろん箴にも折はありますよ。箴は句の数としては短歌行と同じですから。半歌仙は、序・破・急が成立つか成立たないか微妙なところでです。

曉巳 捌いていて俯瞰図の見方が大切だと思います。

紀子 捌く時も捌かれる時も「ルールあれどもルールなし」

でゆきたいものです。

健悟 これは捌をする方の責任でもあると思うのですが、「自・他・場」の指示が、ともすると句を付けようとする人の自由な思考をはばむような感じられ方をしているらしいのは残念です。自由といっても、付ける人の思いだけでなく、一巻の流れや前句の気持ちを含めた世界ですが、「自・他・場」はそこを助けるでだてということが上手に伝わればと思います。

司会 自・他・場は先に立てずに、あとから合わせれば使いやすいテキストでしょう。

曉巳 新人は入り口の表六句でやっかいだなとひっかかります。ここを抜ければ幸福の園ですのに。

慎二 いいナと思う作品は、先ず全体のバランスがとれている。これは皮相な見解かも知れませんが、一巻の真ん中初折の花からナオに入るあたりの二、三句が良いとよい一巻になると思います。発句はいいものはいいのでまづ置いといて、さらに軽いけれども気分が良い印象をもつのはナウの花前後です。

淑代 先生にお習いしたのは、序にあたるオモテは穩かに、ウラ（破の一段）にも小山はありますが、破二段のナオに入って、序々に盛り上げられ、月の前あたりが一番の山場。そのあたりが恋ということになります。ナウは

さらさらと、匂いの花あたりは静かに……ですね。

慎二 恋は難しいのであるべく避けます。(笑)

嬬 女性に対する恨みがあるのかも……。私は捌をする時は、恋句を中心に盛り上げ山を作りたいと試みる事が多いです。「ウの恋句は若い恋」という固定観念も破ってみたいです。

慎二 ハイ、あるんじゃないかと思えます。たしかにそうですが、まさに私の偏見からか、恋は所詮ははかなく、むなしく、悲しいものとうつり、なるべく避けたいなんでしょうってしまふのです。(笑)

淑代 男の視点、女の視点というのがありますね。日本の俳諧(連句)における恋が外国の人に紹介されるとき、ラブ・アンド・セックスという訳になって説明されたりします。外国の人達との付き合いで思うのですが、彼らはあからさまな恋の表現をあまり好みません。連句の恋は、ラブだけでなく、性愛もといて認識がことさらに必要なのかもしれません。私たちの恋句は、あちらの方のテキストですから、考えさせられるものがあります。恋句は大切にしたいと思います。恋としてはウの恋のほうがよいように見えます。

慎二 三つ編とけば、は髪をとくでよいのでは。

一同 (笑) ひがんでいる…。

一卷の納め方

司会 この一卷の納め方としては、どのように考えていらっしゃるのでしょうか。

健悟 第三の「月光」は一瞬異和感がありましたが、これは三日月ととると自然ですね。「星次々とまたたきて」というのは、「一番星」「二番星」と星が生まれる瞬間、それに対置する三日月を出したのではないだろうか。

淑代 三日月でなくても、星は一つ一つきらめくでしょう。月光というのは、やはり、満月、まあい月の光を指すのだと思うのですが。一方では満月の光：別の方では星々の輝き…。

健悟 だって、月光仮面が額につけていたのは三日月でしょう。(笑)

司会 なんと面白い連想でしょう。

紀子 ナウの四句の納め方はうまいと思いました。

司会 恋をなだれ込ませて、病院を付け、花を付け、あげ句に上手にいきました。

曉巳 良く出来た巻だと思えます。自分がやっているケースではこういう句のとり方は、なかなかしてくれないことが多いと思います。

将義 一卷すべてが付きまわっていかなくても良いわけで、

適当に切っているところがうまいです。一卷の変化に心もくばっているし、材料・場所・目くばりがよく行き届いています。

淑代 例えばナオの終りの四句に対して、ナウ一、二にこういうのを持ってくるのは上手だと思います。一句一句は暗いことばが並んでいるのですが、決して暗くありません。この一卷は、健悟さんがおっしゃるように、ネガティブなところのない安定した一卷で、そういう意味では男性的です。

司会 それではまとめさせて頂きましょう。先生、どうぞ。明雅 この一卷をもとにして、私の実作、鑑賞の方法を、具体的にお伝えしようと思ったのですが、皆さん猫褌に入られて、比較的浅いにもかかわらず、よく分っておられるので嬉しく思いました。ただ、問題は、その理解されたことを皆さんが今後、どのように実作に応用されるかです。ご精進を期待します。

晁巳 迷ったとき、ルールに戻るのか、感性を信じてそこらをとるか…。

慎二 今日自由なお話がきけて楽しいことでした。

紀子 勉強になりました。他の人の作品をじっくり読むのはなかなか出来ませんでした、これからは読込んでみ

たい。

健悟 いろいろ考えていることの確かめになりました、いい勉強でした。連句は、詠んで活字になって、そこまでというのではなく、批評され合うということがもっと活発にあっていいと思います。

淑代 これからは、批評というものをお互いにする場があっていいと思います。

晁巳 新たに覚悟を決めて、「鳥の眼」の姿勢で新しい気持ちでやっていきたいです。連句は大変に楽しいので精進したいと思います。

嫋 この作品を読んだように、こんなにゆっくり読むことはなかったです。私は俳句と連句を殆ど同じ頃に始めました。両方ともまだ初心者ですから、貪欲にあらゆるものを取り込んで冒険したいと思います。先生が「夏の日」でおっしゃっているように、二つのものを付け合わせて新しいものを生みだし、人を感動させるのに、俳句は五・七・五で、連句は五七五と七七との間において行うということを感じています。蕉風を守って新しい味を出していくことがこれからの課題です。

将義 まだはややですが、最近はおしやらせてもらっています。皆さんのおっしゃるように、一卷を見渡すことをやりたいです。それに、俳句は評論が活発です

ら、現代連句も評論がぜひ欲しいですね。

司会 連句も評論の場が出来れば、正しい鑑賞・批評も切磋琢磨されると思います。

今日はそういう意味でも有意義だったと思います。ありがとうございました。

※(十三頁参照)

俳句(発句)は十七字の短い中で、一つの完全な詩の世界を創造し、読者を感動させねばならない。そのためには、出来る限り豊かな余韻・余情を内に秘める必要がある。芭蕉は「発句はかくの如くくまぐま迄謂つくす物にあらず」とか「いひおほせて何かある」とも言っている。

ところが、連句の前句と付句とは、この二つを付け合わせて新しい一つの詩の世界を作り出すのであるから、その場合、前句・付句それぞれが力強くその内容を外に押し出していなければ、それを付け合わせても、何も新しいものが生まれ出る可能性はないだろう。

(A)堤より田の青やぎていさぎよき

凡兆

(B) 加茂のやしろは能き社なり

芭蕉

この両句を見ても、(A)がもし発句(俳句)だったら、おそらく「いさぎよき」とまでは言わないだろう。そこまで言えば発句(俳句)としての余韻がなくなってしまう。言い過ぎである。(B)も「能き社なり」とは言い過ぎである。しかし(A)の句に(B)の句を付けてみると、「いさぎよき」と「能き社なり」とが決して言い過ぎにならず、相呼応して、単なる加茂の社の神々しさだけではなく、「枕草子」に書かれている、祭の頃の加茂の社の爽やかですがすがしい世界が生まれ出るのである。

ところが、初心の人はこの発句(俳句)と付句(連句)の文芸性の相異を忘れ、往々「堤より田の青やぎていさぎよき」流の余意・余情のない発句(俳句)を作ることがある。これが「連句をやると俳句がヘタになる」と言われる原因なのである。

(東 明雅)

◇
歌

仙
◇

卯の花に

東

明雅
捌

卯の花につはものどもの集ひかな

軽く塩振る蚕豆の青

野馬駆ける夏野に過す時を得て

トランペットの風に乗り来る

サーカスの明日より聞く月影に

雀蛤になると言ひけり

忍ぶれど利きも利きたるとん辛子

お役所工事けふも談合

銀行の銀行までもお騒がせ

思ひ切れない俤に泣く

ダイアナの水浴覗くカタラクト

セーヌ左岸にたしかめる愛

掛軸もあつけらかんと質に入れ

いろりに沸ぎる南部鉄瓶

蘇民将来子孫の家に月冴ゆる

モンゴル力士鮮やかな技

大川にさす手ひく手の花見船

いつか吃りの癒えてゐる春

東 峯 鈴 木 今 古 日 近 佛 島 東
田 木 村 宮 賀 高 藤 渕 村 明
郁 政 慎 真 水 一 英 守 健 曉 明
悟 巳 慎 郎 男 悟 慎 子 志 二 呂 壺 郎 二 男 悟 巳 雅

朝夕に頬白の鳴く上枝なり

ハーレーダビッドソンの直立

透明な存在と化す少年ら

素手で掴めばからみつく蛸

当分は女難避けよと占し

夜間飛行の匂ふ人妻

声出して読み合ふ源氏物語

カセットデッキ操作分からず

三代に亘るシャッポの塵払ひ

干上るダムの底の古郷

月明の深山に醸す猴酒

旅の疲れをほぐす新涼

合ナウコンのさかりキャンパス蔦紅葉

連載小説今や佳境に

今回も夢に願へる直木賞

何見てるのと肩に来る虻

散る花に腰をひねりて天女像

大吊橋にかかる初虹

平成十年五月二十七日
於 雑司ヶ谷「大倉」

壺 悟 呂 志 英 呂 悟 巳 壺 英 呂 志 慎 男 郎 志 雅 男

青木秀樹 捌

うららかにダビデの像に歩み寄り^ナ

三角むすびサラダ菜で巻き

宝塚また宙組ができしとか

おいでやすとは口と裏腹

底冷の景氣にてこが入れられず

鬼は外へと廁窓開け

残り香のかそけきことの奥ゆかし

素知らぬ顔で社長手玉に

鳥葬を涙で送る婦子の列

円周率の無限永遠

ヘンケルのナイフで削ぎし織き月

パッチワークに励む長き夜

万病に効くと猿酒酌み交し^ナ

愚痴を言ふ人聞かされる人

哲学の道の標識雨しとど

夢物語セピア濃淡

花守は代々続く村の長

ゆうらり歩む風車売

平成十年四月十八日 首尾
於 電通京都対比寮

茂 樹 恵 敏 英 郁 樹 恵 敏 英 同 茂 敏 英 恵 敏 恵 郁

老 鶯 に

市野沢弘子 捌

老鶯に引きとめられし一日かな

竹の皮脱ぐ山荘の庭

白玉の冷たき器掌に受けて

方程式のやっと解けし児

野分くる雲居の月の現れ隠れ

駒を迎へし坂の分岐

ロザリオ祭オルガン弾きのアルバイト

腰にカチャカチャ鍵を鳴らして

選ばれし美男揃ひのW杯

奴らばかりと当る岡焼き

林から野越え川越えスノーマン

バフチサライに仰ぐ凍月

母国語で何処々々までも押し通す

世の行末を計る筵竹

季刊誌を週刊にして主幹たる

地酒名柄全部並べて

散る花に石垣高き上野城

戸板くるりと返る春陰

市野沢弘子
坂本孝子
上月淳子
松本碧子
倉本路子
豊田好敏

孝敏 淳碧 敏孝 淳同 路敏 碧孝 路

ナオ
マリオネット街に踊らせ弥生尽

スパイの渡す煙草細巻き

戦犯は勝者の法に裁かれし

木仏金仏石仏たち

自転車荷台に余る夏大根

アオザイの下しなやかな脛

片言の睦言愛し閨の内

もてなしに慣れ河豚鍋に慣れ

今頃は上方あたり松島屋

通り雨過ぎ濡れし碑

月昇り外科病棟も消燈に

秋の扇をそっとたたんで

ナ
綱取りの夢に故郷の紅葉燃ゆ

やるっきゃないは母の口癖

郵貯金四カ目ごとに出し入れし

CD-ROMで服のデザイン

花恋うて水かげろふのたつならん

農具市へと急ぐ里人

平成十年五月八日 首尾
於 俳句文学館

路 弘 敏 碧 路 淳 碧 敏 同 孝 淳 路 碧 路 敏 孝 敏 淳

風立つや

今宮 水壺 捌

風立つや小さく吹く吾亦紅

夕月浮かぶ薄雲の中

秋思詠む五言絶句を墨書して

久闊叙する才子凡才

子供らに吊され猫の夏休

カーテン越しにががんぼの影

覗きたる凸面鏡に怪物が

城脱出の姫を待ちかね

パ・ドゥ・ドゥ 噂通りの抱きやう

ボンパドルに似たる髪型

寡婦にして窯元守る三代目

余呉の湖にも鶴の来てをり

燭酒の爛の程よき昼の月

円安なぞはほっときなさい

傘を手にしティーの紳士端然と

十七世紀の根付ギヤマン

一山の花びらこぞり夢に舞ふ

土堤の伊勢屋の若鮎を揚げ

鈴木美奈子
浅賀淑代
佐古英子
今宮水壺
古賀一郎
紺野千寿子
池田やすこ

淑英美同淑千淑英一や一

仁王門駒下駄くぐる御開帳

玉垣に沿ひ朝のジョギング

なんとなし流行はやりに乗ってズボン吊り

見かけによらぬ算盤の才

大蔵は暗渠に住まひ移しけり

今日も食事を作らない妻

おしろいの背後霊連れ夫婦

炎暑のピアノドミソドソミド

赤々と夏菜萸熟れし始発駅

こんな遠くにわが家建ちたる

汲みあげし水きらめかす月の光

迎へ火を焚く野辺のわらんべ

とりどりの籠なごの秋果を分ちやり

羊追ふ犬車曳く驢馬

商といふ国の前にも国ありて

サインサービス著者のお出まし

ほがらかに老の杖振る花明り

ひばり上がりて点となる空

※ルイ十五世時代ボンパドル夫人が流行させた髪型

平成十年八月二十四日 首尾

於 桃径庵

や 壺 美 淑 一 英 美 や 千 や 一 美 千 一 千 同 や 美

マリオネット

岩井 啓子 捌

暮れかねてマリオネットの虚ろかな

雪解雪に透きとほる月

豆腐売もくれんの香に憩ふらん

木遣音頭で廻す角材

さりげなくポットを使ふ盆点前

大学ノート団扇代りに

株式の底値は読めず梅雨の明

背で児が泣くままが焦げつく

失はれし唄をセーヌに口ずさむ

国境六つ越えるラブメール

荒鷲を仕込む女に魅せられて

粋なご褒美きついお仕置

雨上り月の明るき飾り窓

鳴子またいで集ふ浪人

薯の酒薩摩渡来をこっそりと

シーラカンスにどこか似てをり

花冷えの黒きマリアを守る村

しゃぼん玉吹く砂山の隅

岩井 啓子
佛 淵 健 悟
谷 部 好 子
鈴 木 慎 二
倉 本 路 子
菅 原 紀 彦

路 悟 同 好 悟 彦 啓 悟 好 二 路 悟 彦 子

揚雲雀スカイダイブの道連れに

孫悟空いざ如意棒を振る

知りすぎた男が語る来世紀

変り身早く生きるビル街

おむすびはたらこおかかにうめこんぶ

さし潮の河のほりゆく船

曝書して祖父の朱線に出会ひけり

癲狂院の中の半年

マルティンとルネと彼女の大騒動

ギネスに載ったキスの濃密

織き月大熊猫のゐない大熊猫舎に

膝に飛びつくえんま蟋蟀

豊年の続く農夫の泣き笑ひ

バイクは納屋に錆びつきしまま

旗を巻く旅芸人を追ひかけて

古木のうろに残す謎々

三尺の袂ゆらりと花のなか

蜩転がる大皿の縁

平成十年三月十六日 首尾
於 江東区芭蕉記念館

彦 啓 二 彦 悟 二 同 路 悟 彦 悟 二 路 悟 好 彦 同 二

十三夜

内田 麻子 捌

十三夜火入れの近き登り窯

めぐる水車の軌むやや寒

太刀魚を鋭き包丁に捌くらん

BGMに合はすハミング

タイトルの活字を選ぶ明朝体

窓の外にはふはり綿虫

雪吊りを終へてくつろぐ紺法被^フ

ドライブしようよ海ぼたるまで

年下もいいなと思ひ軽くキス

ぐんぐん沈む西の太陽

戒名の値段も議論の種となり

あめんぼを飼ふ子の洗面器

軒菖蒲挿して仰げば月まどか

九谷の風鎮貰ふ銭別

リストラで上司忽ちマレーシア

ガーデニングの流行るこの頃

卓に置く鳥類図鑑花曇り

芥子菜漬の味にこだはる

内田 麻子
八角 澄子
市野沢 弘子
山口 みづゑ
高瀬 美保
上月 淳子

澄子 淳子 保 弘 澄 保 弘 淳 弘 淳 弘 弘

春スキー存分飛ばす横手山ナオ

あれは幻術持つ魔女

青信号人溢れ出る交差点

携帯電話近く鳴りだす

あの男の言ひなりに又なりさうな

返事は和歌の散らし書きにて

閨の中あかとき嫌と泣きし姫

喉をうるほすエビアンの水

根釧の原野に現れし北狐

大木倒す音の響ける

満月の傾くまでを独り酒

茸番して偲ぶ牧水

秋深む「さて」が口癖老夫婦ナウ

ベストセラーを読んだ読まない

不景気と言へどバーゲン繁盛す

紅茶いろいろ棚に揃へて

花散らす風に吹かるる夕まぐれ

畦に帰る頬白の群

平成十年十月二十九日 首尾
於 梶が谷房連庵

澄 麻 弘 淳 ゑ 保 澄 弘 淳 同 ゑ 淳 保 弘 淳 保 同 澄

広重の春の驟雨の藍の色

パリオークション木槌高鳴る

電柱の陰に探偵張り付いて

揉んで開いて鼻をかむ紙

図書館の窓にかすかに残る虫

クリスマスにも兄は帰らず

亡命の志士歌姫に貢がせて

恨を乗り越へ添ひ遂げし仲

日本海岩礁に上がる涛しぶき

屋号で呼べる村の有線

宵月夜座長はひとり想を練る

シナモンの香は林檎焼くらし

敬老の席に招かる運動会

病癒えたる帽子羽根付け

銅鏡の出でて耶馬台国揺れる

講師多忙で多い休講

我もまた花の重さの旅衣

頂近く鶯の琴弾く

平成十年十一月六日 首尾
於 俳句文学館

瑞 文 淑 淳 瑞 二 文 二 瑞 淑 淳 淑 文 二 瑞

八月尽の驟雨

大窪 瑞枝 捌

珈琲や八月尽の驟雨

ビルの谷間に淡き弓張

銀やんま昆虫図鑑確かめて

電話しきりにかかる留守番

生協の有機野菜を配るらん

プール帰りの子等は真っ黒

ダービーへ赤鉛筆を耳ばさみ

乗り物代で消えるお利息

連れ添うてけちの無駄のと揉め通し

スイートテンのダイヤねだられ

寒月を仰ぐ被衣は鬼女の面

水棹を止めて釣りし杜父魚がくが

丸むすび三角むすびハミングで

漫画少年プロになる夢

宝物鍼力飛行機隼号

いろはにほへと蔵の錠掛け

行堂を出でてこの世の花吹雪

春の火鉢でちよっとお小言

大窪 瑞枝
上 月 淳
長 崎 和
今 宮 水
篠 原 達
梅 田 利

枝 子 代 壺 子 子 和 利 壺 淳 利 達 和 達 利 達 淳

刈^ナられたる羊びょんぴょん跳ね回り

轍の跡は地平線まで

華麗なるグリッサンドをヨ[※]ーヨーマ

哀歎つくし砕く盃

天蓋の寝台に侏儒を潜ませて

白き乳房に当つる毒蛇

昼ひそと蒼朮を焼く山の宿

光陰といふ不可視なるもの

カーナビは行きすぎてから写し出し

既往症なし進む問診

更待の会議そろそろこの辺で

組合回るおくんちの寄附

明治節生^ナれが自慢祖父の像

ロンドン仕立てニッカーボッカー

ゴンドラの窓拭き不意に「こんにちは」

取り落したる巢子の塵吹き

花に酔ひ助六に酔ひ大向ふ

遠く遠くに歌ふ貌鳥

※世界的なチェロ演奏家

平成十年八月二十九日 首尾

於 俳句文学館

壺 枝 壺 淳 達 同 利 壺 和 淳 壺 和 達 同 淳 和 壺 達

風立つや

大島富美子 捌

風立つやつくつく法師刻惜しみ

少ししぼみし木槿数輪

月の窓標本整理子と共に

クリップ飛んで探す板の間

ボンネット開けて思案の道路脇

湯気ふんはりと蒸し鰻頭

うばめがし備長炭も口伝にて

土佐の荒波遙か望める

八金も抱きしめられてこわれさう

かまととがいいそのままがいい

乱高下円も株価も見えぬ底

雷鳴に引く鈍牛の綱

葵挿す賀茂の宮居の淡き月

豆腐味噌汁凝ればきりなし

湯治宿とりたてのものの売りにきて

ポーカーなんぞ受ける手ほどき

花の山掏摸の一家も花筵

世界平和の標語うららか

大島 富美子
豊田 好敏
田村 満子
加藤 道子
蒲原 志げ子

敏 同 道 同 同 げ 敏 満 げ 美 満 道 同 げ

ナ
太柱鯁御殿は坂の上

馴れし唐棧婆の着こなし

演出家灰皿投げる罵声飛ぶ

不適切なる関係の痕

蠅捕草中に火の道女道

阿修羅の髪に汗がしたたる

開店のアウトレットに長き列

ぽっくり靴は歩きにくさう

自転車を漕げば減らせる体脂肪

油うつすら残る包丁

砂時計砂の白さを照らす月

帰燕見送る茫々の原

ナ
皮袋提げて爽けし馬頭琴

形見のZIPPO肌身離さず

週毎に八卦辻占巡る癖

魷場戻りの舟に銀鱗

散る花を受けてバカラの酒の杯

バルビゾン派の耕の人

平成十年九月二日 首尾
於 鎌倉おんめ様

満 美 満 敏 げ 道 げ 敏 げ 道 同 満 道 げ 敏 げ 満 敏

桜桃忌

文 音

桜桃忌黄ばむ津軽の初版本

時零しつぐ篋底の紙魚

三伏の山に登れば海見えて

シャッター頼む撮りつ撮られつ

月齢を宿題の児の正確に

世界地図あり長き夜の壁

掃き清む堂百畳のそぞろ寒

男でござる何の気後れ

舞踏会大佐夫人の流し目に

九官鳥は何ておしゃべり

対策はあるやうで無い選挙戦

ご存じないか鍋が焦げとる

着ぶくれを月に覗かれ外厠

羽子板市は手締シャンシャン

銀行は店閉めてから忙しい

乗換へ三分樽見線迄

花ならば薄墨が良し朝ぼらけ

だんだら蝶の羽化のはじまる

金久保 淑子

蒲原 志げ子

篠原 達子

淑

達

淑

達

淑

達

淑

達

淑

達

淑

達

淑

達

淑

駘蕩と仕舞ひとさし金屏風ナキ

大河小説決まる書き出し

禁煙も禁酒も何時もあしたから

箱のはづれた桶のころがる

夏期休暇豚児のすなるアルバイト

腹拵へは回転の鮎

ああ痛いむし歯引き抜く藪医者奴

新婚ルンルン何とでも言へ

シースルーむっちり色白十六才

不毛の愛を嘆く熟年

幸運は使ひ果して望下り

秋闌くる苑犬の遠吠

たんばナウ串長短あれど孫の作

傘寿祝ぐとて金箔の酒

産土の宮に玉垣奉納し

テレビに映る満面の笑み

ジョッキーのカップ高々花の道

夢ひろがりて暮れかぬる空

平成十年六月十三日 起首

平成十年九月十八日 満尾

淑達げ淑達げ淑達げ淑達げ淑達げ淑達げ淑達げ

秋の果

蒲原志げ子 捌

宇宙との交信続く秋の果

青き地球と真ん丸の月

枝豆を飛ばしあふ児等叱るらん

ミシンを踏むに糸の絡まる

ポケットにマジックの種幾種類

兎は下る坂が苦手だ

夷講売り買ひ成って三拍子

新女房の紅と細眉

鼻先に出自の誉れぶらさがり

重賞レース逃げる穴馬

デビューには剣の舞のタクト振る

玻璃戸の汚れ力まかせに

子鴉は大口開けて月を待ち

土用鰻がそしる源内

粉飾と知りてジレンマサラリーマン

掛継ぎ注文不況ものかは

路地奥に花の若木を植込みて

共同水栓とまる蝶々

蒲原志げ子
本田弥生
中川凡
橋野代々子
豊田好敏
生

敏代生凡代同敏げ生代凡生敏代生凡生

人麿忌小町忌和泉忌式部の忌

癌病棟で聞いたすり足

鉄串の堀をひらりと大泥棒

「それ程ぢや無い」講釈師殿

口説にはちと高級な泡盛で

神田祭は法被いなせに

ハミリに斜線が走る濡れ模様

戸の無いトイレ中国の旅

駅頭の貼紙で知る墨絵展

拾ふ蘊蓄おでん鍋から

この月をルナディアナとかアルテミス

破れし夢か黄落の詩

ナウ
蟻姑五能一技もなさずビビと鳴き

爺は自慢を孫に百遍

探知機の魚影を追ひて北の海

春の事ぶれ配る番付

花の業咲かねばならぬひたすらに

野にひろがれる囁りの中

平成十年十一月四日 首尾

於 鎌倉おんめ様

敏 同 代 凡 敏 凡 敏 生 代 凡 代 敏 生 敏 代 敏 生

桔梗や

倉本路子 捌

かの丘の桔梗やいまも咲くならむ
ほの月白に浮ぶ俤

アトリエを風爽やかに吹きぬけて

御用聞きらし鳴らすピンポン

飛び乗りを止めて時間に間に合はず

また片方を落す手袋

鳩のむぐりにも似しジャズダンス

息はづませて恋のささやき

どうせ嘘聞いてるふりの惚れ話

敏腕刑事ここが肝心

ハローワーク時給千円列が出来

金魚すくひの紙の薄さよ

予後問はれ夏瘦といふ月の縁

島田正吾が切った大見得

馬手は客弓手お宝招き猫

貰ふ土産の箱は上げ底

短歌誌の「心の花」を賜りて

老樹の脇に伸びるひこばえ

倉本路子
式田和子
金久保淑子
豊田好敏
蒲原志げ子
篠原達子

和敏 げ同 達和 淑和 達和 淑敏 淑

遍路笠脱げば金髪碧眼で

齒科医の削るドラキュラの牙

なんだって俺んとこだけ雨降んの

大鍬形が二百万円

ちよっぴりの布地の水着歩くだけ

減量をしてぶすの変身

マツチヨなる奴に抱かれんそれが夢

プレジデントも御しかねる秘書

三猿は見ざる聞かざる存ぜざる

しきたり多き家の年越

月の宴皿鉢料理を目八分

今年酒とて注ぐご亭主

孫達の喜ぶ案山子コンクール

機内禁煙旅は止さうか

船頭が歌ふ舟唄最上川

立春大吉鳥居建替

散る花に涙ぬぐふも花衣

初虹かかる浄土への道

平成十年八月二十一日 首尾
於 新宿角筈地域センター

和達和達げ和達げ和達げ和達げ和達げ和達げ和達げ和達

春^{ナオ}うららクラシックカーコンテスト

モンキーレンチ握るもののけ

玉頭に歩を打つ無礼許されよ

酒壺を抱く竹林の中

巴里やがて暁迎ふ頃ならん

野兎跳ねる着陸の時

お隣の嚏の数を数へつつ

ゆふべの恋の行方占ふ

あの人の背に残った爪のあと

ご喜捨申さん托鉢の僧

Uターン知命の月をうちながめ

鳥^{ナウ}が啄む葡萄一粒

居並びてばい廻しにも位あり

ニユースソースは村の婆様

窯出しの余熱に鳴りし磁器の白

手話で語りぬ将来の夢

知らぬ間に写され居たり花影に

霞の中のビルの窓窓

平成十年二月六日 首尾
於 俳句文学館

達 紀 壺 達 淳 壺 紀 弘 達 同 紀 壺 同 弘 淳 弘 達

櫪黄葉

坂本孝子捌

滾つ瀬や岩にも細き櫪黄葉

きらと魚影の走る夕月

縋りあげし新絹の弦艶やかに

漢字書き取り見せにくる吾子

公園へ誘ふサッカー仲間なり

にはたづみにも初氷張る

氣に入りの手袋どこで失ひし

ファーストキスはお芝居の後

フェロモンを酒に溶かして酔はすママ

貸し渋りする町の銀行

羅刹橋暗渠となりて人流れ

ななほしてんたう掌より翔たせぬ

月に吹く草笛哀し留学生

カスバに深く志士をかくまふ

当店はとんこつラーメン汁に凝り

捨看板に車買ひます

野仏の笑みおほどかに花吹雪

一家総出で緬羊を刈る

豊田好

坂本孝子
長野和代
市野沢弘子
篠原達子
中田あかり

弘敏同達弘
代り代り代り
代り代り代り
代り代り代り
代り代り代り
代り代り代り
代り代り代り
代り代り代り

春の夢新人賞を逃しけり^{ナホ}

ポストモダンはまだ模索中

今宵また鼠小僧の墓欠けた

長屋の壁に五寸釘打ち

初恋の傷みに厚く包帯を

皇子妊りし鶴渡る頃

英国の薔薇の香永遠にクリスマス

ミルクの渦のめぐるお紅茶

老いぬればほんに苦勞な長台詞

愛が肥やしと注ぐ孤兒院

丘の涯遙かに月の照り渡り

宇宙船中クルー爽やか

パリコレのスーパードールそぞろ寒^{ナウ}

外反拇指の靴を探しぬ

煙草吸ふ疲れたときはふかぶかと

よなぼこりする単線の駅

花万朶落人部落人を見ず

果箱をかけて終る実習

平成十年十一月六日 首尾
於 俳句文学館

弘 孝 代 孝 り 同 敏 達 敏 達 弘 孝 り 代 り 敏 達 り

ノのなき鬼

式田 和子 捌

※つ

ノのなき鬼に詣るや盆の入り

願ひほどほど月白の空

整髪の店主の話爽やかに

掘出し物の根付けゆれある

練習をまた繰返す喜遊曲

サッカーファンあぐる歓声

鋭き眼持つ彼は狼野に放て

失恋てふ語吾が辞書に無し

傷つくがいやで半端な抱き合ひ

幸福駅の切符完売

宅配で送るクラブと双眼鏡

縮ステテコいつも離さぬ

血吸蛭漢方店に弦の月

香港市場株価低迷

雀荘でツキ始めたら酒頼み

ホモサピエンス手拍子を打つ

あかときの湖に散り来る花燦々

石鹼玉吹く夢の嵩ほど

式田 和子
おたけんのすけ

近藤 守男

佛 淵 健 悟

高 橋 豊 美

峯 田 政 志

古 賀 一 郎

今 宮 水 壺

島 村 暁 巳

幸 福 郎

男 悟

巳 男

け 巳

鈴 木 慎 二

壺 二

け 悟

け 悟

け 悟

木母寺に梅若侶^{ナキ}ぶ涙雨

スプリンクラー今故障中

のっぺらが久闊を叙すこはいかに

天上棧敷椅子の寒々

年守る藍壺深く色秘めて

博打のかたに未通^{おほ}女攫ひぬ

はちきんと知ってもぞっこん子沢山

節水ゴマを入れる水栓

ウィルスに強いメロンをお土産に

菊籬流る背戸の黄昏

月賞づるばかりぞ古今新古今

叩きかねたる腕のおくれ蚊

こ^{ナウ}んなときどうする百のおばあさま

お岩木山のちっさまに聞け

螺子まけば時計時々動き出し

棋譜を読みさす陽炎の縁

注連内におはす木花開耶姫

躍らせて打つ若鮎の串

※鬼子母神のこと

平成十年八月十一日 首尾

於 雑司ヶ谷「大倉」

美子男巳郎二郎壺美二け志悟二志壺巳美

月の波

下鉢 清子 捌

魚跳んで月の波生む心字池

漢詩吟詠うたた仲秋

樽柿をほどよき味に醸しゐて

電子レンジの料理あれこれ

山荘のテラスの白い椅子・机

夕立にめげず押しかける友

かた言の嬰遊^ウばせる縫ひぐるみ

外股の癖お振袖でも

小錦はタレント業に専念し

捨てて神あり拾ふ神あり

熱燭を呷れど男口説き得ず

櫓に寄り添ひ恥ぢらひの月

熟年が隊列を組むエベレスト

塵問題^{チン}は西も東も

緬羊に絡^カってゐる鴉をり

二泊三日のビデオレンタル

羅生門くぐりて浴びる花吹雪

世界遺産を廻るお遍路

八代

下鉢 清子
佐田 政志
村古 英子
神谷 安子

志安 志安 英美 清英 英安 志安 志安 志安

ボートレース浜に残りしスニーカー

指の火傷がまた疼き出す

伝統の技を祖父から曾孫へ

チャレンジする猫シカトする犬

すれ違ふ香水の娘の悪魔めき

夏衿抜いて褐色の肌

ジョイナーは記録残して早逝し

少年法の基準世につれ

空井戸は江戸城内へ続く道

伝言板に記す丸文字

待宵の投銭たまるチェロケース

イーハトーブの爽涼の頃

聖堂に蟪蛄は斧あげしまま

一切放下酔漢の顔

ホームラン七十号は Yankee で

留守番電話昂ぶりし声

夢に見し石割りの花去り難し

風吹くままに揺るるふらここ

平成十年十月五日 首尾
於 源心庵

安 清 美 英 志 嫺 美 嫺 美 安 志 英 嫺 美 志 英 安 清

モネ色に

鈴木美奈子 捌

黄落の街モネ色に染まりけり

ヴェールをまとふあへかなる月

羊皮紙の古地図を開く秋の燈に

何でも舐めて這ひ廻る嬰

省資源エコロジーカー人だから

生活一変蛇衣脱ぐ

避暑の宿ただゆっくりと湯にひたり

姫の吟味にかしましき輩

持ちたての妻を早くも持てあまし

堕ちたルーブル世界撼がす

横綱の兄弟喧嘩綱で決め

火の番小屋に酒の差し入れ

ハープ橋冬月かかるベイサイド

ウィーン留学メール打つ母

年金で金融商品物色し

小鍋に移す罐詰の粥

花びらを払ひもせずに太極拳

鐘も霞みてまどろみの釈迦

鈴木美奈子

豊田好敏

中野昌子

敏子

式田恭子

奈子

敏昌

恭昌

敏昌

恭昌

同奈

奈昌

昌敏

同奈

昌敏

敏昌

春の蚤チワワの目からこぼれ落ち

「無重力」には軽い付句を

四つ角の出合ひがしらに放水車

頬っかむりして逃げるノッペラ

大歌舞伎空に幟を立ててやしよう

思はぬ妙手雷鳴が呼ぶ

替玉と知りても抱けば情が湧き

娼婦とも見え貴婦人かとも

モノクロのレトロが売りの写真館

銀座育ちの白のマフラー

二上りの撥鮮やかに弦の月

盆の小波川面揺りて

父のこと酒と語らん残る菊

マージャン好きの夢は役満

フィナーレのカーテンコールくり返し

薬玉割れば鳩の飛びたつ

鬼瓦そつと吹き過ぐ花の風

笑ひとまらぬ四方の山々

平成十年十月十三日 起首

平成十年十一月十日 満尾

於 渋谷連句会

鈴木慎

昌 奈 恭 昌 二 恭 敏 二 奈 恭 昌 奈 二 恭 昌 敏 昌 二

虚空蔵

副島久美子 捌

虚空蔵は秘仏なりけり実南天

旅の衣にかかる初雪

すぐ倦きるゲームソフトを積み上げて

蛍光灯の長き紐揺れ

真夜の月棧橋に潮満ちるらし

蛤となる雀どれやら

盛り上がる国体選手壮行会

御当地民謡箸の袋に

トロピカル腰蓑娘に通ひ詰め

キラウエアと妻は噴火す

銀行がだめ証券も紙つきれ

人工芝を敷ける屋上

エトランゼ夏至の満月仰ぎたる

さても見事な鰐の骨切

濃茶点つ起承転結定まりて

隣の垣根ゆるむ結び目

花散り込む宅配便に扉を開き

三毛の仔猫を貰ふ船乗り

副島久美子

八角澄子

島村暁巳

金久保淑子

篠原達子

澄子

達子

淑巳

淑巳

同淑

同淑

同淑

同淑

同淑

同淑

同淑

同淑

同淑

風光る大通りゆく鼓笛隊^{ナオ}

露都を真近に奈翁敗るる

サザビーで仁丹帽子耀り落し

エスプレッソを一息に飲む

凍港に告知を迷ふ医者が佇ち

聖燭節の堂の片隅

教へ子と睦み絡まるピアノ室

コードレスフォン呪縛ほどこせず

肩凝りはおんぶお化けのせいにし

て里芋田楽酒したむ月

烏瓜いつもの塀に色づきぬ

丸き墓石に集ふ去来忌

ナウ
古時計修理一筋古希の父

折込ちらし丁寧を読む

終電車又も走って飛び乗って

手話でにっこり話しかけられ

紅枝垂散り敷くかたえ花蓆

畔に触れつつ舞へる蝶々

平成九年十二月十七日 首尾

於 源心庵

達 巳 澄 巳 同 淑 巳 澄 同 達 澄 同 達 久 淑

寶散らし

染谷佳之子 捌

古稀迎ふ寶散らしの春着かな

初雀らの遊ぶ坪庭

フリージアうしろの席に香りゐて

軽い会釈を交すのどけさ

しゃぼん玉真昼の月へとんでゆけ

串でくるりとかへすたこ焼

妙齡が酌を受くるに腕まくり

お白粉彫りの竜をちらりと

どうしてもときめきませんすみません

いつもの小径ぬける蔵町

大師講鈴切る音の軽やかに

医薬分業兄と弟

蚯蚓鳴きあの手この手とJ R

夜毎に月の太りゆくなり

通草の実エステサロンに飾られて

思はぬときにポケベルの音

一団の兵征きし夢花の下

はるかな沖に蜃気楼立つ

染谷佳之子
倉本路子
竹田登代子
今宮水壺
佐々木有子

登壺之之路壺登有登壺之路壺登有登壺之

ボス猿の仇名キムタク山笑ふ

株の予想のまるで当らず

南無天主・釈迦・天照大御神

香港風邪のワクチンがない

高速路をんどり一羽のしあるき

水鉄砲で狙ひたる恋

ダーリンとはじめて呼んだ祭の夜

誰か知らねど尻をこそぐる

好江さん江戸の啖呵をあの世でも

喉をうるほす番茶ひとのみ

ありありて今のありけり月の宿

爺と坊やでべい独楽を打つ

妖怪の面をかぶってハロウィーン

ポップコーンが鍋ではじけぬ

悠々と不況の嵐はいくぐり

積み上げておく美術全集

花筏乱れて浮きし鯉の鱗

ボートレースのエール交換

平成十年一月六日 首尾
於 大久保地域センター

登 之 有 路 之 同 有 壺 登 路 壺 路 有 登 路 登 壺 路

ほととぎす

田村 満子 捌

暁をひとりじめしてほととぎす

濃淡連ね滴れる山

夏料理つけ汁までも冷すらん

ねぢ巻き時計油ささねば

織き月推理小説読みふけり

ジープに誘ふ牧を閉して

茱萸の紅熟れて甘いか酸っぱいか

まだ青きまま少年の性

シスターは懺悔をすれば許される

教会通り坂の函館

壊れ椅子割引で行く映画の日

「不夜城」並ぶ衿巻に月

困に床屋のポール急回転

わづかな髪に四千元だぜ

骨董は白洲正子の独壇場

主人忠義の犬に吠えられ

御衣黄の昭和公園花盛る

琴弾くひとのうららかな昼

田村満子
橘文子
式田和子
加藤道子

和田道子 和田道子 和田道子 和田道子 和田道子 和田道子 和田道子 和田道子 和田道子 和田道子

村の子に挨拶される遍路道

生魑魅憑く背の重たき

ここだかと思へばあちら小角翔ぶ

ぶっかけうどん地粉ほどよし

碁会所に煤逃げ同志鉢合せ

相手にやらぬ俺の熱燭

耳たぶの薄い女の深情

うはなり打ちは長刀を持ち

鎌倉にゆめ国体の開かれて

潮騒に聴く若者の声

望の月クリオネ掬ふ砂浜に

小人七人茸かついで

電車内よろけて踏まるそぞろ寒

携帯電話はある種公害

フランスは遠くにありて想ふ国

透きとほりつつ生るる初蝶

洞から木花開耶姫笑まひ

春雨傘に濡れる片袖

平成十年七月一日 首尾
於 鎌倉おんめ様

道満和道同文道同道和文和文満道同道

入道雲

豊田 好敏 捌

富士筑波入道雲の生れけり

初蟬らしく仰ぐ街路樹

パソコンの機種あれこれと思案して

トランプカード手つき鮮か

帆船の舳先にかかる月の影

色なき風に羽織る一枚

角伐に觀光客の群がりぬ

人違ひから結ばれし縁

浮気虫とこそ嫌はず顔を出し

ファーストフーズ屋の食卓

「運命」の終章重く響ききて

力不足と首相しはぶく

ブラジルのサッカーファン涙月

マットグロッソ越えし飛行機

通販のできてわくわく未知の国

宗派を問はず死者に読経

花篝見慣れし人と笑み交し

過ごしてほのと雛の白酒

豊田 好敏
五味 蓉子
副島 久美子
青木 泉子
峯田 政志
間 佐紀子

美 志 美 紀 蓉 志 蓉 泉 美 泉 美 蓉

農協ももづく畠で富つくり

クローン研究豚も登場

弱法師の見たこと拒み見る世界

錦眼鏡を子等と取りっこ

いづくにかタイムカプセル埋めた筈

しゅっとひと吹き治る水虫

河童忌に禿を気にせぬ友と酌み

受け身ばかりで懷に落つ

老いてなほはまりて抜けぬ女装趣味

ホモの夫婦を親に持つ嬰

窓越しに水屋を照らす望の月

路地に秋刀魚を焼く煙満ち

ナウ
二科展を軽い気持で挑戦し

十年はもつパスポートとる

駄菓子屋は養子が継いでくれるとや

細巻たばこ奨むのどろか

修道女ミサの帰りを花の宴

春灯に書く便り数通

平成十年七月十五日 首尾

於 江東区芭蕉記念館

紀 敏 泉 蓉 同 泉 蓉 泉 紀 敏 美 志 美 紀 美 蓉 紀 志

長崎 和代 捌

復活祭帽のリボンの空色に

原書枕に寝込む浮浪者

天皇の御名すらすら諳んじて

シャーロックアンのバツジ手に入る

素通しの眼鏡も並ぶ蚤の市

本日休診すててこ先生

縁台の政談この世面白し

ちらりと覗く野鼠の髭

ストローで吸ふ酒乳房吸ふやうに

想ひを送る老のパソコン

鏡花忌の月を仰げる真砂坂

休暇明けたる学生の町

爽やかに槍投げの槍弧を描き

エステサロンへ夢買ひにゆく

とりたての運転免許とるところと

胡麻のはりつくあんぱんの臍

これよりの月日惜しまん花明り

もういいかいを巡るてふてふ

平成十年十月六日 首尾
於 新宿大久保センター

登 路 壺 達 路 登 千 壺 登 達 千 壺 達 登 路 登

暈^{ナオ}み鰯ちよいと摘むで酒の当

旅は道連れゴマのハへでも

髭先の塵までお祓ひいたします

男骸骨絶えし玉の緒

河童忌のいつも横顔龍之介

カンカン帽を空に飛ばされ

エンジンキー抜くの忘れドアを閉め

出来てしまった娘不始末

混浴の歎に溺れし夢の中

コロシアム燦月のローマに

休暇明ゴミの分別忙しなく

模様替へする部屋のうそ寒

落魄^{ナウ}の自分史なんか書くものか

上手に逝きし友を羨む

役満はホームランだと囃したて

ゴム風船にガスを入れ過ぎ

散り敷きてなほ美しく花名残

春の古跡で葺一服

平成十年七月一日 首尾
於 鎌倉おんめ様

翠 代 生 敏 げ 翠 代 敏 生 敏 げ 代 生 翠 敏 生 げ 翠

膝送り

春風邪のやうやう癒えし組頭

娘の挙式ミラノの大聖堂

大相撲尻出しルックパリで受け

温泉饅頭蒸しあがる湯気

看板に火吹きひよっとこ去年今年

美髯の作家かざす冬帽

宙返り帰還の後はままならず

姉さんの過去聞いて泣いた日

Tシャツの下にブラジャーする無粋

おできを舐めてゆめかうつつか

悲田院ほのぼの出づる望の月

慎しみ失せし英雄の秋

倒産の憂き目忘るる放生会

寄らば斬るぞと名調子にて

長男はバイリンガルに育てたく

アンカレッジの鯔鮎なつかし

獺犬をつれて花見としゃれこめる

銀貨一枚ありし鳥の巢

平成十年十一月十六日 首尾
於 雑司ヶ谷「大倉」

志 慎 郎 悟 男 志 壺 英 慎 郎 悟 男 志 壺 英 慎 郎 悟

ほんのりと

文 音

ほんのりと椀の明るき葛湯かな

耳をすませば風の歳末

ミュージカルショーのドレスを試着して

ききわけのいい犬を坐らせ

みづうみに波のきらめく月の夜

旅の途中の瓢からかひ

隙間から障子貼る子が笑ひをり

壁に向かって座禅組む武士

サイコロのかさかさ音の止まざりき

嫁いだ時も今もおかっぱ

ふくよかな胸の辺りで受ける盃

秋波送って機密聞きだす

梅雨明けの月の試走車蹲り

声ばかりなる臺の草叢

きのふより遠近両用眼鏡かけ

選挙ポスター出来は上々

初めてのヘリコプターで花を追ひ

磁石は北をさして春光

中澤す
佛 潤 健 悟
が

同 悟

ナ
唄りの野に巫女たちの定休日

さつと済ませた朝のシャンプー

たはむれに切火などする職探し

公園口は鳩の群れゐて

見る人が見られる人になるアート

合はせ鏡で整へる髭

梁上の君子は昼のご出勤

あれこれしてとせまるユキちゃん

ともかくも七難隠す白い肌

地図を広げて空想の旅

玄関に毬栗ふたつ置いてあり

月の宴のいつか終りぬ

ナ
ゴルフする父のスイング爽やかに

定年になり丸き教へ魔

うす塩のぽとちっぷす止められず

文芸賞のメ切は明日

想ひでをのせて花散る並木道

Vサインしておへんろの宿

同 ず

平成九年十二月十九日 起首
平成十年十月二十三日 満尾

五葉松

松本

碧捌

市ヶ谷や小さき緑陰五葉松

糸の長きがゆれる薬玉

納涼の映画場所取り急ぐらん

ポップコーンを運ぶ両手に

飛機は今着陸姿勢月照らす

休暇明けなる留学の吾児

新走り比丘尼まゐらす酒升々

ちよつと鼻声すれすれの術

失神をしたふり乗った救急車

方向音痴迷ふ六道

ザンビアで本社勤めの辞令受け

備長炭を風呂にポットに

鶴渡る月に望遠据ゑしまま

地雷の撤去募金集めて

栄誉賞異国の丘の吉田節

無煙の竈飽食の民

金銀に逢ひの振袖花衣

炉の名残とて香をききをり

松本 碧

神谷 安子

式田 和子

蒲原 志げ子

須田 智恵

和

恵

安

げ

安

恵

和

げ

恵

げ

安

和

猫の手もかりて長屋の団扇張り

錆びた刀を抱き眠れる

核実験地下にどかんとパキスタン

赤信号を無視するは誰

軽舩の子のよちよち歩きに応援団

浜昼顔も螢袋も

謎めいた微笑たやさずコンパニオン

媚薬一滴たらす早業

何も彼も忘れシャボンの泡の中

現世にある地獄極楽

満月に語りかけてる二度童子

べったらしの糍匂へる

珈琲をやや濃く入れて秋惜しむ

旅の鞆に坂の上の雲

発掘に賭けし青春悔いはなし

いつもの癖でしごくあご髭

咲き満ちて伽藍しづもる花の寺

川のよどみに春鮒の影

平成十年六月二十六日 首尾

昭 草 良 草 良 昭 良 草 昭 良 草 昭 良 草 昭

原宿

八代

嫺捌

原宿の骨董市や春深し

若者溢れきらは東風

じゃらず手に親猫先に飛びつきて

公民館で習ふ体操

居待月豪勢に盛る芋・団子

紅葉の栞ハードカバーに

小鳥来る丘寝過^ろしてゐるクビド

雄牛の背に娘攫はれ

分刻み恋の相手の予定表

硯の水の乾くいつの間

崑崙を越えゆく僧の藜杖

蟾と一緒^{ずっしょ}に月光の道

三線の弦替へますと貼紙に

ワーカホリック風呂に食ふ寝る

エドウインの古着ジーンズ買ひ集め

大陸横断蒸気機関車

花入れて記念写真の三世代

元帥殿が見遣る蜃楼

八代 嫺

浅賀 淑代

吉村 ゑみこ

村田 富美

高橋 豊美

五味 蓉子

代 豊 富

蓉 代

蓉 代

蓉 代

蓉 代

蓉 代

代 蓉

こ 豊

豊 富

代 富

代 富

代 富

夏帽子

山口みづゑ 捌

夏帽子ぽんと放りたし水平線

卯波さ波のゆるる釣舟

ビュローに象牙のナイフ置かれゐて

メモ未だすまぬ蔵の品々

調べつつ琴柱をずらす月の窓

客まうけには新小豆炊き

お旅所に届く角樽宇佐祭

バイク飛ばして行く高速路

籠りつつボリウム上げる隣部屋

別れ上手がこっそりと泣く

珈琲は深煎りだけとこだはって

木の間がくれに月の梟

アルテミス獵犬脇に征矢つがへ

貧に堪へつつ留学の画家

通貨危機再癸予測やかましく

三年坂ですってんころりん

花吹雪室町よりの翁面

心字の池に鳴くは亀かと

山口みづゑ
島村曉
原田千町
梅田利子
大窪瑞枝
佐古英子

枝町英已
利枝町已
利枝町已
利枝町已

ナオ
ナ

スーパームデル集ふパリコレ

塗るだけで痩せるクリーム売れに売れ

のっぺらぼうはこんな顔かと

何刻と聞かれて蕎麦屋銭かぞへ

箆で掬った恋の様々

カサノバの見境もなき無分別

決闘の赤僧院の黒

岩山のあれが狐の剃刀か

蛸姑とり給食のパン

月優し孤児の夢には父と母

板門店を超える高西風

ナウ
土人

師の影長く五歩下がりとる

よく似合ふアンモナイトのループタイ

微醺の人の口笛のジャズ

頂上はいさ中腹の花に寄り

竹林院の暮れかねる庭

平成十年五月八日 首尾
於 俳句文学館

英 彡 巳 町 利 町 枝 同 英 同 枝 町 巳 枝 町 利 枝 利

万卷の書に埋もれる弥生^{ナオ}尽

パイプ燻らしジャズピアノ弾き

アフリカの土地に馴染みし商社マン

信じる神がもとで内紛

粉雪は森の中から湧くやうに

マント深々赤頭巾ちゃん行く

絶倫の菓が効いて無理重ね

方向音痴老いらくの恋

夕映は紫となり野は暮れて

月と語らふ鬼瓦なり

総代の庫裏を手伝ふ小重陽

あんなこんなで身に入みる頃

運動会めざす鯨^{ナウ}ばん喰はれけり

政界の地図すでに混迷

魚泳ぐ水族館のアーチぬけ

耳元に來て唸る姫蛇

写せしは花か卑弥乎か古代鏡

後円墳をつつむ陽炎

平成十年六月十七日 首尾
於 高木盆栽美術館

文 壽 樹 孝 澄 壽 孝 樹 孝 澄 同 孝 壽 樹 文

◇ 短歌行 ◇

馬の 躰

加藤 道子 捌

武士^{ものふ}の馬の躰や月端正

古き都に揺るる秋草

今年絹流行のドレス縫ひ上げて

摺まり抱く嬰のにつこり

小港^ウの船溜りにも汐ささん

波乗りの板岩に立てかけ

パラソルのマドンナ薄き雀斑で

匂ひあまやか指も握れず

積年の想ひを秘めし金大中^{キムデジュン}

父の教へは詫びる素直さ

山裾は花に埋もれお祖師様

けふの献立菜飯あんかけ

加藤 道子

田村 満子

橘 文子

橋野 代々子

金久保 淑子

本田 弥生

同

満

文

淑

同

大島 富美子

ナオ
うらうらと犬の春蚤取ってゐる

粗品いろいろ呉れて勧誘

直木賞無頼狂気のはざまにて

安き酒場に満つるざれ唄

適切な関係たもち月凍る

浮気の虫はしばし冬眠

先づ体力スポーツクラブ老盛ん

「世界の車窓」好きな番組

ナウ
謎の土器泥の中より発掘す

禁煙忘れ教授一服

ビル街のあはひに舞へる花ふぶき

種浸されて並ぶトロ箱

小
原
正

代 美 道 生 文 同 子 満 同 文 代 正

平成十年十月七日 首尾
於 鎌倉おんめ様

猿梨の実

久保田庸子 捌

猿梨の実のさんざめく浅間山

赤とんぼうを追ひかける児等

シネマ観し余韻に仰ぐ月ありて

素焼きの壺を飾るデパート

化粧塩板前稼業も板につき

浴衣の似合ふ娘おきやんで

葵祭終れば嫁にゆく噂

キーホルダーのチワワ・プードル

円株にドル安加速きりもなし

伸びた身長減った体力

百歳を過ぎて生きたり花乞食

墨の濃淡画眉鳥を描く

久保田 庸子

吉村 ゑみこ

篠原 達子

佐藤 世止彌

達

庸

達

こ

彌

こ

彌

こ

春^ナの海見え隠れつつ新幹線

Eメール出すノートパソコン

外科学会英語ドイツ語とび交ひて

閨閥妖し絹の帷に

据膳は食はぬつもりがふらふらと

次へ引き継ぐ夜警当番

月高し氷柱数へて童歌

鯨骨眠るチベットの土

バド^{ナウ}ミントン夢の優勝地区予選

ひねもす坐る煙草屋の婆

格子より花の舞ひ込む仁王門

亀を鳴かせる酒の一献

平成十年十月十一日 首尾
於 柏市光ヶ丘近隣センター

達 こ 達 こ 達 こ 達 こ 達 こ 達 こ 達

初月夜

近藤 守男 捌

庭草の影も馳走や初月夜

墨絵の襖入れてゆかしき

秋狂言親子二代が大賞に

サイクリングの足も軽やか

ラマンチャにカスターネットの音響き

冬の港にともす繋船

外套の隠しの文をまさぐりつ

うらみの大門やがて見えくる

デスクには心中ネタがとびこんで

競馬競艇蘊蓄の果

花朧御言葉を賜ふ園遊会

木遣づくしに暮れて行く春

今宮水壺

椿紀子

鈴木美奈子

池田やすこ

古賀一郎

近藤守男

壺

郎

美

紀

男

美

ナオ
そろそろと虫うづきくる伊勢参り

泳へ切れずに齒科医求めて

毒物の事は知らぬと白を切る

一服いかが点前鮮やか

秤もつポーシャ涼しき恋裁き

メロン熟れたる肌に月光ゲ

長命も酒の御陰と僧都様

猫のかんぶくろけふもにやあにやあ

ナウ
メロディーの変れば渡る交差点

模試の帰りに立ち読みをして

白日の夢か鬼女舞ふ花の下

名のる雲雀は晴れし御空に

平成十年九月二十八日 首尾
於 杉並区桃井桃径庵

郎 美 男 美 や 壺 紀 美 郎 紀 や 壺

奥武蔵

佐古英子
佐藤世止彌
捌

茅蜩の限り所や奥武蔵

流れはつかな池も新涼

取り分けし月見団子の大きくて

シーソーゲーム逆転に沸く

ゴビ砂漠RV車の横断し

毛衣脱げばふっと移り香

かさかさに手足荒れたる人を抱き

タレントグッズブーム去りたる

酔ひましたブラディメリー二杯目で

貰ひし猫は闇に豹変

天竜の淵にただよふ花の影

和蘭芥子わらべ摘みゐて

佐古英子

八代 彌

秋山 志世子

山田 美代子

佐藤 世止彌

同 彌

代

彌

世

彌

世

彌

春山の小屋の主もバツハ好き^{ナオ}

内ポケットに入れしロザリオ

大統領燎原の火を消しかねて

百年の恋秘めし古井戸

夏の月翼乗りつぎ逃避行

落せし飴に黒蟻の群

孔子像無住の甍見下ろせる

和綴ぢの画集父の遺せり

綴帳は「夢」をテーマの話題作^{ナウ}

ブラボーの声やと鎮まる

楠を脇にしたがへ花大樹

風合戦に若衆繰り出す

平成十年八月二十五日 首尾

於 武蔵嵐山・国立婦人教育会館

世 英 同 代 彌 同 世 代 嬬 彌 同 嬬

大河めく

長坂 節子 捌

大河めく矢作や鮎の跳ねやまず

篠の子採りの黒き長靴

海外へ旅の支度もとのいて

携帯電話オフにしておく

月^ッ今宵ビルの谷間に猫ひそむ

宅配便で新酒一樽

ひよんの実にころしばらく身を離れ

姉恋う人を忘れられない

頬かむり千両役者雁治郎

何度振ってもピンゾロの丁

無欲にはなれぬうつしみ花ぐもり

琴弾鳥のうそようそよと

八木 聖子

繁原 敏女

高橋 良風

長坂 節子

同

風

聖

節

女

風

聖

女

ナオ
遍路道明るき会釈交し合い

スナック経営早も十年

秘めおきし話ひそひそ通夜更けて

ふせられているボチのどんぶり

同級会焼ぼっくいに煙たち

朱の帯とろりとろり解かせる

牛乳をあたたためている月まどか

ふいに鳴き出す土間の鈴虫

ナウ
突き押しの横綱相撲の前捌き

緊急取材大使館へと

歌おうか「貴様と俺は」花の友

いで湯の里をつつむ春風

矢崎

同 風 聖 同 風 女 同 風 同 藍 風 同

平成十年五月十九日 首尾
於 桜花学園大学二三三号室

夜長

原
みね子
捌

おちこちに明りともれる夜長かな

野分のあとに残る細月

いとこ会蜂の子飯をもてなしに

弟泣かせ奪うチャンネル

ホームラン競う二人の新記録^ウ

地麦酒工場次々に建つ

旅気まま郭公を聞く自然林

幼馴染に絵手紙を書く

人違いされて夢見る女となり

別れまぎわにそっと口づけ

花の雲堰のあるらし川の音

苗代道を犬と駆けゆく

原

みね子

加藤治子

繁原敏女

小園好

女

好

女

み

好

み

女

治

紙風船天まで届けと打つ童^{ナオ}

富山のくすり本棚の隅

雑魚少し皆で分け合い賑やかに

君の湯呑みでお茶を下さい

終電にわざと遅れてラブコール

タイヤスリップ凍りつく街

冴ゆる月佇む影の北岬

働き過ぎてちよっと疲れて

からころと下駄を鳴らして銭湯へ^{ナウ}

一円玉が一つ落ちてる

お大師と花の迎える札所寺

段々畠春の耕し

柿
本
時

好 治 女 代 好 代 好 代 好 代 女 治 好

平成十年九月二十九日 首尾
於 桜花学園大学二三三号室

星 合

矢崎

藍 捌

星合や空耳ならめ呼ばふ声

木槿ほのかに浮かぶ夕月

旅土産マロングラッセ包ませて

順番決める兄と弟

本棚^ウの山頭火集冬の雨

狐が出たと単線の駅

紫の綸子の肩は酔ひたるか

ただ逢ひたいと思ひつゝのらす

天渺々地は茫々の恋の果

壁に残れるハンゲルの文字

減反の田を遊ばせて花吹雪

ぐんぐんあがる風の手応へ

後藤東潮

矢崎 藍

稲垣渥子

繁原敏女

谷本守枝

加藤治子

同

渥

潮

敏

枝

藍

ナオ
コンビニの窓暮れかぬる二交代

主任の趣味はインターネットと

「あれ」と言ひ「あれか」と応へ切るメロン

規格も同じ分譲の家

下馬評のままに決まりし総裁選

何度追っても群れる鳥め

月まどか指切りげんまんまたあした

野菊の里を捨てし若者

ナウ
毛槍投げ時代祭はゆるゆると

風渡るらし池のさざ波

病む妻に一枝の花見ペルシャ壺

窓を開けば舞ひこみし蝶

平成十年七月二十八日 首尾
於 桜花学園大学二二三号室

渥 敏 潮 枝 渥 藍 渥 敏 枝 潮 治 枝 潮 治

◇二十韻◇

五葉の松

稲垣 渥子 捌

時雨るるや五葉の松の威を正す

水辺に羽をたたむ寒雁

副都心まんが喫茶のドア開けて

タータンチェック流行る制服

飛行士^ヲの宙返りして眺む月

待つ人の居て浅茅色づく

濁り酒にくいあんちくしょうの薄い唇

土蔵の壁に傘の落書き

経済か基地か沖縄苦渋する

猫を追いついてバイク疾走

浅 香 宏 子

稲 垣 渥 子

矢 崎 藍

加 藤 治 子

渥

宏

藍

同

渥

治

ナオ
岩絵の具色鮮やかに道祖神

石狩鍋に旅愁癒さむ

よく動く豎琴弾きの長い指

煙草吸ってもよろしいですか

月涼し二人で分けた片ピアス

恋のバカンス浜木綿の蔭

ナウ
騙し絵の螺旋階段なぞりゆく

老婆ばかりの眼科待合

ソーサ打つ夢の球宴花吹雪

弥生の空に浮かぶ霊峰

平成十年十一月十七日 首尾
於 桜花学園大学二三号室

同 宏 治 藍 宏 渥 藍 治 宏 渥 藍

再会や

稲田 千寿 捌

再会や日照雨過ぎたる夏館

さくらんぼ食む幼な子の笑み

祖父の声釣に行くぞと竿下げて

ベンチの猫が大欠伸する

一万歩めざしてこよい月の径^ウ

盆の祭にナンパ期待し

秋陰に舐めては癒す恋の傷

淋しい人が遊ぶパソコン

菓子パンが転がっている寮の部屋

帆影見えぬ青き海原

八木 聖子

柿本 時代

青山 桂樹

原 みね子

福井 直子

由川 慶子

聖

代

同

聖

鈍^{ナオ}行で昔の任地巡る旅

バカラのデキャンタ買ってみようか

ピン札のこんなところに忘れられ

人住み代る風のごとくに

冬の月掌にぬくめいる空せ貝

可哀そうなは惚れたってことよ

縞^{ナウ}の帯妻は消費が家訓とか

パスタの湯気のうららかにたつ

木曾節を遠く聞きつつ花の下

跡継のなき畑も春耕

代

稲田 千寿

後藤 志津枝

聖

長坂 節子

同

代

節

寿

執筆

平成十年七月二十八日 首尾
於 桜花学園大学二二四号室

下り築

猪子 春治 捌

下り築一輛電車橋渡る

紅葉をゆらす警笛の音

雲ながら栗名月を待ちてゐて

子を案じつつ時計確かめ

神父さまけふのお話胸に沁む

やつがれどもは恋の下僕に

リーダーがブローコンハートと大さわぎ

猫に噛まれて犬に吠えられ

ひなたばこ介護保険の来る日まで

春を隣りに海辺吟行

猪子 春治

杉山 壽子

青島 ゆみを

中森 美保子

壽

を

壽

同

保

を

ナオ
高きには竜馬の像の立ちゐたり

飛行機北へ豆つぶとなる

そばぬれてやらずの雨に胸疼く

言葉少なに青蚊帳の中

月笑ひ籜脱ぐはらはらと

冗談ごとではないと若者

ナウ
古館手ずれとなりし歌集読む

お酒いろいろ野遊の宴

花片のあまた舞ひ入るにじり口

蝶も出て来てまどふ留袖

平成十年十月二十八日 首尾
於 名古屋住友クラブ

同 保 治 保 壽 を 同 壽 保 同 壽 を

さみだるる

木村 真呂 捌

さみだるる軒先深き詩仙堂

でんでん虫の伝ふ柴垣

焼きたてのパウンドケーキ卓上に

兄と妹で選ぶCD

木村 真呂
百武 冬乃
吉村 ゑみこ
山崎 一恵

峰^ウの松月影浴びて黒々と

ドライブウェイ風の爽やか

網代打つ技の話に興じけり

四万十川を下る船歌

隣の娘ちよっと見ぬ間に大人びて

指からませてコンビニの前

同 同 同 乃 乃 恵 乃

ナオ
クローズの札立つ園は霜枯れぬ

月の窓辺に寒灸の煙

米中の狭間うろうろ龍太郎

女捌きの腕にうぬぼれ

ストッキングくるくると脱ぐ姿見に

妖怪めけるニューハーフなり

ナウ
世界地図改訂版が次々に

馬上盃もてのどらかに呑む

有為の山無為の谷より花便り

光りあまねしお遍路の笠

平成十年七月八日 首尾
於 池袋 滝沢

恵

ゑ

乃

同

ゑ

恵

ゑ

恵

呂

執筆

翁の忌

桑原 美津 捌

野に佇つや雲に声する翁の忌

千里越え来し鶴のひと群

美しき名の地酒ばかりの並ぶらん

リトルリーグに入団の吾子

招待状はらりと開く月の窓

夜寒の猫の嫉妬深くて

紅茸のやうな唇目の前に

今度丁なら俺のものなり

峠ゆく力強さのアブト式

ハイホーハイホー小人七人

八角澄子

豊田好敏

山口美恵

坂本孝子

桑原美津

好

孝

美

同

孝

汗拭いて嘘を消す嘘懺悔室^{ナオ}

水争ひをあざ笑ふ月

ひと先づはバルカン半島休戦す

座付作者に渡す賂

抱擁はいま体臭の海の中

チャタレー夫人恋のかわゆさ

薄造り箸につまめば透くやうな^{ナウ}

春の展示に変わる呉服屋

尺八と琴に合せて花の雨

蝶追ひかけし妹の夢

平成十年十月二十一日 首尾
於 江東区芭蕉記念館

澄 美 津 澄

美 孝 好 澄 好 孝

梅雨明くる

篠原 達子 捌

辛口の酒を一気や梅雨明くる

片肌脱ぎのすててこの父

コンサート蝉鳴く里に開かれて

石蹴りながら帰りゆく道

収穫し琉球薯を照らす月

盆に逢はうと言ったあのひと

恋しいとワープロの文字西鶴忌

チョコレート入り飴をなめなめ

公園の我楽多市に客まばら

狎と散歩の狎に似た顔

篠原 達子

東 明 雅

高 野 永 世

吉 村 ゑみこ

雅

達

ゑ

世

達

雅

ナオ
肩車子が目玉置く雪だるま

月青々と出でし冬嶺

大入りと不入り重ねてどさ廻り

男と女マニユアルはなし

ピ。ピ。ピ。と感じたら即マイダーリン

わたしの夢は歌ふ金絲雀

ナウ
伝説の湖めぐる馬車に乗り

スタイン域にもゆる陽炎

白無垢の花嫁姿謝肉祭

誓ひの指輪揺るる芽柳

平成十年七月十九日 首尾
於 柏市光ヶ丘近隣センター

世 雅 達 忍 世 雅 達 忍 世 雅 達 忍

スピードのクイーン

島村 暁巳 捌

スピードのクイーン引当つ年忘れ

絹の絨緞伸びる黒猫

駅前に香味野菜の店ありて

時には肩へ竹のステッキ

月光^ウの長城視察キッシンジャー

柱の向ふ招く秋扇

行水の名残の嫂に睨まるる

繻襴六尺干せる物干

故郷の山のしきりに見たきころ

科白ぶつぶつスタジオの隅

猪瀬侃勇

吉村 ゑみこ

篠原達子

今宮水壺

侃

達

ゑ

巳

侃

達

中年の肥満くらべの水着ショー

寝冷え腹痛点滴の月

空也佛偈を吐き給ふ宙に

無声映画のキッスぎくしゃく

決闘も恋にも強き保安官

遮断機かすめRV逃げ

倒産のいよわが社に迫り来ぬ

秤に乗せて計る青柳

紅枝垂影を映じて花筏

夢のごとくに雛のぼんぼり

平成九年十二月二十日 首尾
於 赤城社会教育会館

壺 ゑ 壺 巳 侃 ゑ 侃 巳 侃 巳 達

俳諧の話

杉山 壽子 捌

俳諧の話あれこれ今朝の冬

うっすらと立つ珈琲の湯気

万博の候補の道を歩みゐて

双眼鏡を磨く指先

横笛^ウの遠音に月を待つならん

芒のかげに恋の斉王

抱きあげて芸術祭の幕が降り

ペダル踏みつつ笑ひころげる

大陸の青さどこまで天安門

石けりの子ら寄ってじゃんけん

杉山 壽子

式田 和子

高橋 良風

武村 利子

宮川 恍子

青島 ゆみを

長谷川 芳子

くの あや

細川 研三

森岡 しげる

ナオ

うるさいと頑固爺さま怒鳴りだす

鮎釣る竿に乱る宵月

河童にも皿へつぎやる酒少々

啖呵も覚え極道の妻

ご安産とし子双子とご立派に

夢占ひの本が続ぞく

ナウ

過ぎし日の名選手達スポーツ談

干潟を鳥のレストランとす

山寺に花を追ふ人相まみえ

畳紙にある春の紋付

平成十年十一月九日 首尾
於 名古屋住友クラブ

利 壽 を 仇

同 風 和 三 風 芳

十三夜

武村 利子 捌

蹲に水満たしけり十三夜

武村 利子

煮上がったのねマロングラッセ

長谷川 芳子

運動会帽子とばして馳くるらん

細川 研三

洗濯物が竿でひらひら

浅井 沙衣子

山^ウ遠くアルペンホルン流れ来て

宮川 侑子

番ひ鳩見る僧院の窓

衣

青春は最後のおとぎ話です

利

太って割れたシンデレラ靴

芳

旧友といふ名の友と冷し酒

三

扇を持ちし癖もさまざま

同

吉田屋で襲名披露仁左衛門^{ナオ}

船乗り込みにゆれる提灯

岩風呂の隙に動めく影のあり

枕屏風の破れ繕ふ

月凍つる亜硫酸結晶しんと置き

度胸決めたか俎の鯉

老^{ナウ}いてなほ二番出世を夢に見る

子らはのどかに迷路めぐりを

金堂をいでしこの身に花吹雪

佐保姫様の裾に春風

平成十年十月二十八日 首尾
於 名古屋住友クラブ

芳 三 侑 衣 芳 侑 衣 侑 芳 侑

岩井啓子さん追悼

合歓の花

合歓の花優しくまぶた閉ぢにけり

野に振られゐる夏の手袋

ログハウス焙煎珈琲香るらん

本棚の上伸びをする猫

小雪^ッの澄み渡る月浅草寺

爛酒呷り急かすちよき舟

ドンファンが転がり出して噓して

柿落しに歌劇上演

銀の握り程良き杖を持ち

観光馬車の蹄高らか

橘

文子 捌

橘 文子

浅賀 淑代

近藤 守男

山本 要子

山崎 一恵

文

代

男

文

要

ナオ
ひっそりと隅が定座の常連も

話の長いかるのうろん屋

頑なに使ひ古した鯨尺

瑞西帰りの時差ぼけの月

美少年紅き林檎を掌に

ちっち蟬鳴く寡婦の軒先

ナウ
汐風に崩れ初めたる砂の城

微熱もありて春のかぜひき

夢なれや花の女神に誘はれ

はつ虹かかる故郷の丘

平成十年七月二十五日 起首

平成十年八月二十五日 満尾

於 東郷神社社務所

男 代 文 要 文 代 男

杉 内 徒 司
高 橋 豊 美
秋 元 正 江
男

冷 奴

谷 本 守 枝 捌

事もなく今日も過ぎたり冷奴

裏庭を埋め咲ける十薬

過熱するサポーター団映されて

猫も私も寝るに寝られず

丘^ウの上の古き城跡月昇る

笛の音さやか風の間に間に

あつあつのふたりっきりの盆休

抱いて抱かれてくせになりさう

このごろはネーミングよき本並び

右脳人間左脳人間

谷 本 守 枝

繁 原 敏 女

加 藤 治 子

浅 香 宏 子

同

女

半 田 壘 子

伊 藤 美 緒 子

枝

宏

着^{ナオ}ぶくれて嫗小さき顔になり

月円かなる夜咄の茶事

国後と択捉見えぬ水平線

九十キロでレンタカー駆る

過去のこと問はぬ問はぬとくだを巻き

唇をすばめて新妻の嘘

あ^{ナウ}げがたの夢に故郷の峠道

雉のほろろは友を呼ぶ声

吟行を兼ねて誘はれ花巡り

パラグライダー仰ぐうららか

矢崎

同

女

藍

治

女

藍

枝

藍

治

執筆

平成十年六月二十三日 首尾
於 桜花学園大学二二三号室

秋果の香

田部みどり 捌

いづこより秋果の香り地下の街

月見の宴へメモを見せ合ひ

つづれさせ糸を通さむ針穴に

はづした眼鏡不意に出てくる

オ^ウフィスの書類の嵩の一二寸

キャリアウーマン秘めし恋情

遺伝子をもらひし男今いづこ

先行不安世界情勢

くさめして綿入れさがす休みの日

蒸饅頭に渋茶すすりて

田部みどり

細川研三

浅井沙衣子

伴野末季

青島ゆみを

武村利子

三

り

季

くのあや

ナ
オ

「考へる」ロダン彫刻見とれをり

定年生活今に始まる

吞みませう髪のはつれ毛搔き揚げて

小指かんだり汗拭いてやり

南国の空に輝く夏の月

遠くつづける弓なりの浜

ナ
ウ

威厳あるセピア色した祖父の像

野原かけっこ遠足の子等

寂しさの弘川寺に花を浴び

絵皿のマストはらむ春風

平成十年九月三十日 首尾
於 名古屋住友クラブ

三　を　利　衣　や　利　季　や　を　衣

冬ぬくし

中川 哲 捌

冬ぬくし抜け路に聞く水の音

中村 ふみ

紅葉散り敷く背戸の踏み石

松本 碧

はちまきの板前頭微笑みて

中川 凡

そんじょそこらを片付けてゐる

中川 哲

かりがねの斜にわたる月の暈^ウ

池田 やすこ

迎鐘撞く六道の辻

高橋 豊美

身にしむやあの世の恋も金次第

み

芸者のうちにおっしゃるものよ

碧

取的のずしりずしりとリズムとり

凡

オーブンカーに舞ふ紙ふぶき

美

和唐内蘭鑄琉金子とながめ

夏月浮ぶ南の空

リストラに縁談もきて僕たいへん

幼な妻なりママゴトのやう

遊牧民碧眼金髪輪になりて

牛の糞にも群れる虫あり

ファールブルにあこがれし日の伊予緋

陽炎ふがごと変幻の術

山海の珍味美酒花の宴

記念撮影鳥つるむ中

平成十年十一月十日 首尾
於 渋谷連句会

こ 哲 碧 み 美 凡 こ 哲 碧
中 川 真 紀 子
碧

打たれ上手

長谷川芳子 捌

秋桜や打たれ上手の五十歳

長谷川 芳子

月に問ひます「私って何」

杉山 壽子

生姜和へお平に少し盛られゐて

猪子 春治

室内楽は無伴奏チェロ

宮川 兎子

政党のかげりに御幣振る総理^ウ

中 森 美保子

恋の告白失笑を買ふ

壽

青年のもぢもぢしてる幼な顔

春

ナイスショットの行方はるかに

保

国境のゲート吹き抜く大南風

芳

素足の翁馬冷す川

兎

魚拓ある店に大勢集まりて

南無阿弥陀仏改心の酒

横丁の口三味線のふととぎれ

焚火もいらぬ相思相愛

月凍ててトリクロ汚染案じあひ

たてつけ悪き引戸がたびし

故郷のふれあひ会館賑へり

逃げる風追ひ走る子供ら

花ふぶく西行庵に訪ね来ぬ

日の斑まだらに田螺田楽

平成十年七月二十二日

平成十年九月三十日

於 名古屋住友クラブ

起首
満尾

野崎由

壽

美

保

芳

仇

壽

仇

由

保

同

夜の画布へ

細川 研三 捌

夜の画布へ色七変化大花火

はね帯結び浴衣着る児ら

アニマルの型にクッキー焼き上げて

電子手帳に予定打ち込み

北^ウ欧の尖塔に月澄める街

囀にかかる小鳥哀れむ

紅葉かつ散りつつ狂ひ恋をれば

逞しき王酔ひしれる美酒

政界は化かしたつもり化かされる

インターホンで所在たしかめ

細川 研三

伴野 末季

武村 利子

田部 みどり

青島 ゆみを

子

を

り

季

三

月山や

東
郁子
捌

月山やあけびは神の贈り物

東
明
雅

玉兔を仰ぐ大雨の後

武
井
徹

秋拾乱れ箱より取り出して

武
井
雅
子

ピアノ連弾熱心な子等

武
井
睦

豊漁^ウの旗立て沖の船帰る

東
郁
子

五番街まで軟派しに行く

明

頬杖をつく女ひとり喫茶店

徹

郭公響く樵の森蔭

雅

音もなくオープンカーの走り去り

睦

銘酒の酔に大賞の夢

郁

天才と氣狂の差は一步と^{ナオ}か

慇懃無礼国会答弁

料亭の鮫鰯鍋に映る月

ダーリンを待つ門の靴音

金婚の旅思ひ出のアメリカへ

無芸大食肥後のもっこす

白球を追ひし事みな遠き夢^{ナウ}

訪ぬる寺は春風の中

城跡に咲き初めし花八重一重

もつれもつれて双つ蝶々

平成十年九月二日

於 山形市錦町 武井 徹居

明 徹 雅 睦 郁 明 徹 雅 睦 郁 明

石路咲いて

宮川 恍子 捌

石路咲いて客をもてなす庭となり

抹茶ほのかに口切の茶事

鼓笛隊商店街に響くらん

スクランブルで犬が尾をふる

向井さん月を真近に流星も^ウ

恋を恋する漢露の目

生焼けのハツは柚釜でよくゆでて

政策無用合はす員数

この辺り母のおはせし家の跡

地中海へと船の旅する

杉山 壽子

武村 利子

田部 みどり

浅井 沙衣子

長谷川 芳子

青島 ゆみを

壽

利

猪子 春治

り

メ^ナガ^オフォンとビールで野球応援し

レースカーテン月にゆらゆら

ながながと化粧水つけ夜の仕度

させてやりたや性の転換

居直った弁天小僧稚児上り

小咄のねたメモる落語家

バス停に不揃ひの椅子二つ三つ^{ナウ}

群れる青蛇杖の先ゆく

日当りて明るくなりし花の山

幼ナあやすがうまき新参

平成十年十一月二十五日 首尾
於 名古屋住友クラブ

中 森 美保子

野 崎 由美子

保

宮 川 侑子

を

美

衣

芳

治

を

棚田

和田順子捌

棚田にも人の声あり十三夜

障子に映る蠅螂の影

銀杏散る大道芸は火を吹きて

エスプレッソに添へるクッキー

ローマウ駆く新聞記者のスクーター

駅の看板伝説の美女

秘め事の湖畔の宿を去り難し

不倫清算畳ごしごし

クレパスの似顔大きく冬帽子

福笹を売る女賑やか

島村 暁 巳

高橋 豊 美

和田 順子

山田 美代子

小池 啓子

暁

啓

美

暁

豊

天さかる明石大門に架かる橋

夢通はせて通ふ予備校

頑なに拒む横顔美しく

プリクラだらけ婦警の手帳

勤務明けアロマテラピー夏の月

焼酎瓶に目盛りつけおく

金時の火事場見舞ひと言はれたる

水ぴちゃぴちゃと仔猫猫の仔

翁来し舟着石も花の中

春泥洗ふ旅のわらんち

平成十年十月三十日 首尾
於 東京ウィメンズプラザ

順 暁 美 豊 同 啓 豊 美 暁 順

◇ 半歌仙 ◇

遠き日の

青木 泉子 捌

遠き日の路面電車や春浅し

柵にひらひら遊ぶ紋白

土筆和へ喰はず嫌ひの姉妹にて

お伽噺の文庫揃へる

月の夜を笛吹き流す鄙の街

牧閉ざし来て立呑みの人

鳶^ウからむステンドグラス磔刑図

ロカ岬より鳩の群立つ

約束の地球儀求む暮早し

末は博士と夢の親ばか

中野 昌子

峯田 政志

山田 美代子

島村 暁巳

志

巳

昌

美

巳

昌

謎解きの答に恋を打ち明けて

ふるへる指で開く制服

ぼうふらの上下の規則弦の月

山すれすれに基地のへり飛ぶ

ジョギングに犬いそいそとお供して

見知らぬ人と交す挨拶

花疲れ踊り疲れて集ふ宿

天気予報の告げる初虹

平成十年二月二十八日 首尾
於 筑土八幡社務所

志 美 巳 志 美 昌 泉 巳

鳴き変へて

秋山志世子 捌

鳴き変へてなほ鳴き変へて法師蟬

館址茫々深む秋色

とり組みしパズル難解月を背に

隣の猫をちよつとからかふ

園丁の麦わら帽に滲む汗

氷片うかぶ素麺の鉢

君はギター僕はボーカルビートルズ

国会答弁技のA B

選挙区に残した妻の若返り

電話の度に確かむる愛

秋山志世子

佐藤世止彌

吉村ゑみこ

古賀一郎

中野昌子

こ

同

昌

郎

昌

泣きばくろ妖しく燃えて泣かさるる

タイタニックと沈む乗員

大いなる冬月の暈二重なり

星座の巡る凍土はるけし

修道尼伏して拝せる聖母像

虫眼鏡持ち指の棘抜く

ノーヒットノーランの夢花吹雪

風光る野に交す美酒

同 彌 郎 こ 同 彌 郎 同 彌 郎

平成十年八月二十三日 首尾
於 武蔵嵐山国立婦人教育会館

石神井や

両吟

石神井や雀隠れの照り曇り

今宮水壺

蛙の登る野外ステージ

登坂かりん

古雛に紙雛を添へ賑やかに

代り番こで覗く茶柱

群雲の上満月か十六夜か

自転車を漕ぐ秋の山道

刈^ウ小田に人のをちこち立話

医者^ウの忠告肥満うんぬん

タイガー・ウッドばりにクラブを振り回し

西も東も分かぬ三伏

壺

黒塀の御武家屋敷へ影消ゆる

屏風へだてし衣擦れの音

月凍むと酔ひつづれたる憎いやつ

電卓出して遺産計算

旅の途の母への便り走り書き

金銀銅の銅が輝く

ひっそりと花の名残の寺通り

あの鳴き声はうちの仔猫よ

平成十年四月十四日 起首
平成十年四月二十七日 満尾
於 石神井・クラッティーニ

ん

紅葉見や

加藤 治子 捌

紅葉見や三三五と高台寺

加藤 治子

鳥渡りゆく空に淡月

由川 慶子

筆太に新蕎麦ありと書かれるて

後藤 志津枝

家族の笑ひ孫の片言

稲垣 渥子 慶

交差点オルゴール時計正午告げ

八木 聖子

卯波よせくる海がきらきら

後藤 東潮

方言をおもしろがりし避暑の客^ウ

足^ウのすらりと見えるスリット

空港はいくつの愛の捨て所

離婚届の封をしたまま

離婚届の封をしたまま

渥

潮

治

潮

国宝展金剛力士の眼燃え

チェーンソー唸る故郷の冬

月冴ゆる夜半を美酒と共にして

麻雀かこみみんな元気に

木も風も消えてしまった造成地

やっと卒業八年もかけ

草木染多彩に干して花の庭

クラリネットに踊る蝶々

平成九年十月十日

起首

平成九年十二月十五日

満尾

同 聖 潮 治 慶 枝 潮 枝

仁王の笑み

佐々木有子 捌

時雨るるや石の仁王の笑みほのか

紅葉散りそむ庭の箒目

二階より九々暗誦の声のして

スパイスきかすとりの中から揚げ

医師の像遠き明治を照らす月

砧打つ音今は聞えず

草相撲^ウここで胸はる肥満体

小錦やめてKONISHIKIで売れ

隅田川金にかがやく変なもの

鳥か獣か迷ふかはほり

倉本路子

吉村 ゑみこ

村田 富美

須賀 敬子

佐々木 有子

高橋 豊美

ゑ

路

敬

路

夏の月シャンパンの栓ポンと抜き

お使ひやすとあぶらとり紙

おめあてはきつと僕だと思ひこみ

ローマの休日王女との恋

無重力付句要請宇宙から

いろはにはへとゆらぐ陽炎

遼太郎行きし街道花吹雪

曠野に佇てば春日燦燦

敬 豊 富 有 豊 路 久 富

平成十年十一月二十一日 首尾
於 赤城社会教育会館

新緑を

鈴木千恵子 捌

新緑を揺るがし庵に風渡る

奥処に響く小さき滝音

うきうきと油彩の筆を走らせて

紙ヒコーキをひよいとぶつける

野球場月に照らされホームラン

夜食につまむ手作りの菓子

くねりゆく竜踊のあと追ひて行き

シーボルト像古くあたらし

「愛してる」七か国語で言ってみて

すべり落ちたる下着赤色

鈴木 千恵子

東 郁子

今 宮 水 壺

岩 井 啓 子

登 坂 かりん

市野沢 弘 子

ん

壺

啓

弘

闘牛士牛が横目を使ひゐる

島にひっそり上皇の墓

望郷の凍月仰ぎ波静か

酔ひどれ医者が嘔連発

名人の如き幼児のバイオリン

オオムラサキの蝶育つ里

谷崎が描きし花はこの辺り

春の日傘をそっとたたみぬ

平成十年五月三日 首尾
於 江東区芭蕉記念館

壺 郁 弘 ん 郁 同 啓 弘

桜桃忌

須田 智恵 捌

溝川の静かに早し桜桃忌

須田 智恵

十葉踏みて開く裏木戸

島村 暁 巳

ファクシミリ多機能搭載買ふならん

副島 久美子

兄がかはりに解いた宿題

松本 碧

坂道をひたすら登り仰ぐ月

青木 泉子

蝓蟬の止めばまた鳴く

久

カルテットシンコペーションさやけくて

巳

バックツアーでウィーンからパリ

久

留学の息子場末に棲みつきぬ

碧

流し目ひたと年上の女

泉

懺悔室ざんげの種を又ふやし

裾をからげて掃納めする

山の端に月白々と霰酒

古式馬術の天覧の庭

腰痛に鍼と灸との助けかり

まづ独活置いて洗ふてのひら

朝礼の揃はぬ列に花吹雪

理科教室に蛙合戦

巳

泉

久

碧

泉

巳

碧

執筆

平成十年六月十七日 首尾
於 須田家

飛 翔

一瞬を空に飛翔のシャンツェかな

樹氷きらめく白き峯々

泣きじゃくる涙も涙も拭きやりて

深呼吸して九九の暗誦

満月にもやひの綱を解く小舟

駐在さんとにこり酒酌む

唐辛子^ウぴりりと効かせ菜を漬けん

踏みはづしたはこの階段

死を賭して抗議の沙汰の詮も無き

剣の先の独楽のあざやか

八角 澄子 捌

八角 澄子

高瀬 美保

上月 淳子

山口 みづゑ

淳

ゑ

淳

澄

保

淳

「めし」「風呂」の夫と暮して三十年

蓼喰ふ蟲も夜々は妖しき

更衣衿すがすがと明けの月

異国に老いし修道女病み

デイズニーのメロディで呼ぶ電話あり

春の障子に映る鳥影

ゆくりなく山国川の花に逢ひ

耕終へて憩ふ里人

ゑ

澄

保

淳

保

淳

ゑ

執筆

平成十年二月二十六日 首尾
於 溝の口 上月邸

水の匂ひ

野葡萄やどこかに水の匂ひして

そぞろ歩みつ仰ぐ夕月

たんぽ鍋ありあふものも添ふるらむ

園児の声のひびく玄関

襟巻のだんだら模様工夫あり

パソコン画面ダブルクリック

フ^ッァミリーで迎へる放浪空手武者

世界遺産の寺に驚き

床下を掘れば大甕古き酒

隣の犬に頼む留守番

百武 冬乃 捌

百武 冬乃

八角 澄子

八代 嫺

山崎 一恵

青木 泉子

嫺

山田 美代子

澄

恵

泉

齒並びの矯正済んでにっと笑み

青髭涼し放つながし目

弓張の月に透綾の女攫ふ

踏みしだかれし果物の皮

生ごみの収集車来と鳥告ぐ

三輪山のぞみ畑返す父

花曇歩こう会に道聞かれ

紋白蝶の遊ぶ石垣

恵 泉 澄 嫻 恵 嫻 恵 美

平成十年八月二十三日 首尾
於 武蔵嵐山国立婦人教育会館

壁に雲立つ

山口 美恵 捌

超高層壁に雲立つ夏始

山口 美恵

公園の木々濡らす噴水

中林 あや

玩具箱はみ出す熊を捨てかねて

鈴木 茂

ふたごの為の乳母車買ひ

恵

座蒲団を端近に置く月の客

や

すだちの汁がばつと飛び散り

茂

ト鉢^ッの背の冷まじ山頭火

や

ヒッチハイクのコツ教へます

恵

次々と女を替へる不倫ぐせ

茂

例外だらけ恋の法則

や

シャイロック詭弁に負けて可愛さう

鼻低くする手術格安

寒月に徳利がごろり縄暖簾

貂の襟巻少しチクチク

ピョんヤンのオムニの便り遠くなり

山の湯宿の目張り剥ぐ頃

花万朵街道筋を埋めつくし

囀り真似るボーイソプラノ

平成十年五月二十五日 首尾
於 青山ごみ庵

同 茂 や 恵 や 茂 や 恵

陰の雪

山崎 一恵 捌

町の児の惜しみつ崩す陰の雪

ものの芽ひそと垣の内外

棚の上に白き蚕の眠りゐて

新刊雑誌グラビアを見る

月照らす操縦室のパイロット

次ぎつぎ厚き秋雲の湧く

初^ウ獵の準備万端ととのへぬ

うかと尾を踏み飛び上がる犬

迷宮入りひたすら祈る大蔵省

倒産通り凍つきしまま

山崎 一恵

木村 真呂

神谷 安子

八代 嫺

同

呂

安

同

嫺

呂

メサイアの特等席を買ひ求め

そつと触れられ恍惚の刻

夫忘れ子らも忘れて炎ゆる恋

空瓶並ぶ焼酎の月

ついに逝くへッセ名訳世に残し

単三電池カセットに入れ

花筵団子を好む下戸交へ

ちよつと来いてふ小綬鶏の声

平成十年三月十一日 首尾
於 池袋 滝沢

安 呂 同 嫻 安 同 呂 嫻

十八公 九月一日

権頭 和弥 捌

九月一日児等の大きくなりしかな

権頭 和弥

ポケモンかかし競ふ公園

権頭 史弥

初栗の屋根を素走る音のして

史弥

家族でつかる地場の温泉

史弥

巫女さんとなりたる朝のお赤飯

史弥

絹糸草を囲む涼しさ

史弥

飛魚のクルーズとなり華やげる

史弥

ヴィデオダンスに熱きレッスン

史弥

待宵の犬を先駆け老夫婦

史弥

遠き軍靴よ重陽の婚

史弥

茸^ウ狩りの列島を越すミサイルが

烏天狗の吼へるももだち

このところ一人よがりの演歌道

少し咳込むおかめ・ひよつとこ

落慶の煙火しきりに祝ひ酒

擬宝珠欄干くぐる子雀

花ならば花の話をしてやらむ

髪のリボンに匂ふ春風

平成十年九月六日 首尾
於 上野台山房

史 弥 史 弥 史 弥 史 弥

表合せ 望郷や

秋元 正江 捌

望郷や踏切を待つ冬の月

綿虫に逢ふ無縁坂下

蝶ネクタイカクテルシェーク鮮かに

シテイ派気取りプロポーズする

ひそやかにふたりの間に入る猫

葎替済みしせせらぎの宿

車椅子見上ぐる山の花霞

雛遊びの客はちんまり

岩井啓子

秋元正江

橘文子

倉本路子

文

江

同

路

平成十年十一月二十三日 首尾
於 羅浮亭

◇
百
韻
◇

熱き息

熱き息吐きて揚羽と対峙する

夏果てる日の石の輪郭

歌人の履き替えている浅沓に

太極拳は部屋をきよめて

せわしげに鳴き出したる鳩時計

パスタの生地をねんごろに捏ね

月代の火山の町をもとおれば

試走車きえる稲妻の道

束ねられ出荷を待てる花薄荷

なにかいいことありそうな風

病みがちな姪がグッピー飼いはじめ

外輪船で通う先生

ふり返り見ればかなたの北軍旗

両吟

浅賀淑代

佛洌健悟

革のベルトにふえる××

弁当の菜は焼味噌にんにくで

肌の若さをまたもいわれる

幫間がそつと教える経穴は

つけうまを撒く年の瀬の月

午前零時香港株が反発す

大統領は醜聞に揺れ

バスデー届く小箱の花むすび

春来たりなば夢の茶室を

二^オ おぼろなる記憶の中の海峡よ

タイタニックは鳥風を追ひ

ひとりだけ目つきの違う「晚餐図」

三十枚の銀の重たき

落籍される女が送りつけし髪

ひっこみつかぬ鞘当ての末

そり返る薩摩ことばと土佐ことば

野は一面の麦の秋なり

薄暑中足踏式動力機飛翔

代 悟

くわえ煙草の医師が駆けつけ

高欄にぶらさがつてゐる親子猿

ラドンセンター股引の失せ

たまさかの戦陣訓を弓張へ

芋煮会には碧眼の児も

むしられたとんぼの羽をひろいつつ

前方後円墳の側には

きららかに夜景を統べるパチンコ屋

寝顔をのぞくうしろめたさの

巡礼のあまりせつなき溜息に

がれきの山を驢馬の動かぬ

偶数日奇数日分けて使う井戸

浦粕町に借りる一K

窓ばかりみているフランス人形は

帝の召しも憂きを月明

語られぬ根太に響く虫しぐれ

面も洗わず茸番なる

力石あげてはじまる花相撲

きょうは祠に並ぶ酒樽

三
鱗持つものの棲むとや虹の端

ロレンスと呼ぶ声の聞えて

椰子の実のしたたれる乳は誰に帰す

移民魂護る懐剣

紅白が映しだされる大画面

大穴ねらいの去年も逝きけり

つつましきようでも妻は千支頭

月旅行には征露丸入れ

蛤となった雀の宇宙酔

生まれた家は竹の春にて

乞食の句碑を建てたるみずず村

地酒の味はドライ志向に

朝焼に脚をくじきしカメラマン

陸橋ふさぐ子鴉の親

まんまるの石がぼとりと落される

雲上人のゲームはてなく

このところ枝毛を嘆く乙姫も

金がもの言う浮世存え

まっしろい夏野揺蕩うアルファー波

ゆくりなく遭う弥陀の大悲に

凡夫らの押しくらまんじゅう湯気をたて

頭上かすめる歳末の便

検問の笛をかなたに月冴ゆる

行方の知れぬ犬を思えり

パンの具に辛子をつけぬソーセージ

レンガ運びの名人にされ

滝に来て舳を並べいる花筏

道草というもののどけく

書肆に亀鳴くまで値切る子規全集

音も立てずに六尺の影

ふるさと思ふ柳生の郷なりき

お館さまの馬を守る身の

命じれば口に拳を入れて見せ

オドイーターの効いている靴

長袖をまくらぬやせの伝道師

代 悟

売れぬ燐寸をしまう少女と

軍港は食べられそうな雪が舞い

文を結んだ鳩が飛びたつ

輿入れの列は箱根を越ゆるらし

曼珠沙華咲く畦のみなしく

いざよいの影の差しくる手術台

夜寒の椅子に忘らるる帽

冬^{ナウ}近きイーハトーブのコンサート

ねずみがもらう愛という小名

船降りる船乗りがする厨事

タバスコソース隠し味とは

右翼でも左翼でもいい人が好き

引越しの済む万愚節なり

悪戯のきずを留めし花大樹

凸レンズ雲のせて春山

平成十年八月五日

起首

平成十年九月二十四日

満尾

あ

と

が

き

猫蓑作品集第九号をお届けいたします。

余寒厳しき二月二十三日、校正にお集り下さいました梅田利子・桑原美津・長崎和代・八代嫺・吉村ゑみこの諸氏に厚く御礼申し上げます。

下 鉢 清 子

猫養作品集 IX

平成十一年四月吉日 発行

発行人 東 明 雅

発行所 猫 養 会

定価 一、八〇〇円(送料実費)

印刷所 株式会社 岩田印刷

